



特別  
~ 12  
1077  
13







利  
1077  
#13





須磨

廿八歲 除名 三月より此事をり

源氏君有友遷定事 可為三月才餘日

前二日後友大臣致給事

對面申御事君事

若君沙乳母宰相君傳宮湯道自事

還二卷院留西對給事

次日後苑教里治事 先對西席・東殿事

還二卷院留守事 若同後西對事



遣書於尚侍許

魯北山沙暮事

先魯入適宮給

於活次方近藏人將監取沙馬口這拜

明發社給事

遣書於王命婦啓東宮沙方給事

二來始君惜別事

申時下着須磨浦事

過大江殿事

乃平中細之濕居地事

長雨之立使者遣書於京所之事

二來院入適宮尚侍  
大臣負未

奉書於奇宮又自奇宮有沙使事

見花教里以下沙又給事

七月尚侍歸系因表事

須磨山里秋景氣催表事

手習作繪事

出近海之廊事



市估人々詠奇事

十八日見月思故郷事

筑紫五節君過此浦々次奉消息事

京人々奉惡大君事

山里冬氣色事

源氏君弹琴事

明石入道支婦相語事

廿六歳 三位中納言宰相

三月花比思都事

三位中納言宰相來訪須磨配所事

山里烟度事

海人献海津物事

宰相作文盃事

黑駒为门出物事

三月一日上巳後事

雨風雷鳴事

源氏君夢想事



須磨

河

光源氏端居此浦之故名之歟

む

以歟并詞為喜名源氏少五歳之

月廿餘日須磨の浦に隠居し給

ふわくはさし一才六歳の事すまては

喜よ見てきり

秘

喜名以守詞号く源氏五歳の三月

より次のうし此三月迄もて此事あり

廿四歳乃秋より廿八歳のままたの

事ゆほよみえ此門より源氏除名乃

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



事はあつて一柳の事此末の弘徽殿  
の造意より遠流をへり定むるも  
ちげりやさやう此百をを所して  
ちうくまはようつらひ給ひるるは  
物語のうきさゆゆ也

同去源古四歳の秋より古八歳此二月  
中七の事より三歳せ給ひ源隆若らと  
の事又隆云の事外とこりる一  
もはたはば事ハ仁義五常朋友此がうと  
またこくくさる也

私隆若ら成るる官位とのそ  
くも也

秘抄勅也 隆若一 隆去也又并  
官日隆 師古曰凡言隆者去旧  
官就新官

令獄令 隆名者位記悉 毀應毀  
者並送右政官 毀式部案注 毀字  
以右政官印と毀字上



坐事 坐被罪也増坐獄對理日坐  
已上称名院の自筆にて写し  
唐紙ノ切也

世中

舟

浮氏と遠藤と入る外を定まけり  
をまらるるにうり給ふもはあつて  
其内へ入るるは  
義岡世中れり  
其あとの事  
今年七月  
其の事  
白紙見







まはる事紙に記す書ありては  
辭をばまに記ししる言のみる下  
さそふ心楊非字法よりてりまあり  
せり記しありて記す也

せんと志すは海よりありて

しきし發音してありてくやとて  
義同海のうらうら龍のまはる人にく  
のうらうら也とてとて理の改あり  
て是より海に記ししるやありんや

ま魚とていけ人も漁者ありん  
りし記す也

或抄に記すていけりて次摩のうら  
水漁者と定海をいふとて海に記す  
九條抄に入道右府云 和名 毛詩三百篇  
ハ思ふ邪の三字とて記す風雅ハ  
邪心肝要也 海氏物語とて監者必  
裏の心とてみよ也この理紙に記す  
萬事にわら也再同乃時く此



あふん病の也

又天正<sup>甲戌</sup>春の比太細<sup>實隆</sup>内府<sup>内府</sup>之光隆

は地結乃可見并同詞のりりこれ

んりちの双子此祈用し義が瓜不實

よるひ一事たを同結れい答之也別

深成乃初一書の門めてもそん

と用入結り況平又十四指の同意

以初もそんはうそ然也用めてまら物

めていそ祈めてん得てい一向理子

○よりそ是用めてまらうそにみ定ふ

はそそ前くめて祈の出来一是の別

たりしとお中にな有紙あは

ん也そいやうにいふ別こまらにま

つとらそい一部の面白さ味い入るま

くふたはそこく乃はなまら此をうに

心合してい式部う印意可失面白人

乃一生涯の前後の古今集一部也

うの古今一部い又十四指とぬいと



別あつて之を彼を礼とありのまゝと我  
く為後人覚悟也

又對讀し時云源氏の流く此句と一章  
一章又前後のそ尾又坊と作意と  
大度の候とを不失極りし流る見  
当一と又十と極り内一と一と或る私の  
初紙一毛取と和書し初と虚字を  
能く流るし一と流れて作者此れを  
言相違し極り意味と極一言一と或る

私の初紙と云流事し才一乃奇極  
中中事也況乎世一字此内と私  
まゝなる新遠の初と云半と天道思  
あつてりは流るし別と一抄と此教  
訓依成殊術し思書加テ茲者也  
已上九條

か乃と流るし

光源氏大初在細と此著紙流ては  
流るせしゆれ古來此讀下し人の  
配流り字者小なりてた近とり也



今の源氏大納言の流しおとせせわれと  
城印の藤原居せしむるや周公且東征  
の流成るる流れ風雷の雲霞と  
お似せし又新平中納言は後うれ  
古今集之田じししの西河の事にあたりて  
津のふしむるしあはく流りつけらふ  
念れうらゝつけらふ人くつらうら  
とあり端の野相公の流の初流成  
しならされつけらむか

源氏大納言流成浦の流成るるは  
ては新平の中納言を流成るる  
ししと周公且の二叔の流成るる  
東征し事成流成るるししは又  
菅原相西宮の流成るる事  
左遷し流成るる野相公の流成るる  
しし例としてしし又伴周公は  
りは流成るる藤原居ししむる  
事成るるししにむらて事成るる



はくしんまればつりうれをとり合て  
物治しはくしんまればつり合て  
子武王乃才と源氏の自稱せし  
因ら且よとの書成るす一人は神授也  
仍平卿まばりありてりはくしん  
事又因ら且管叔蔡叔は漢より  
て東征せし事とり合又管蔡相  
高祖古述乃の事とり合一人一人を  
うしてはくしん五大臣加して  
一才とあり事本派生とありあ  
凡は是は仍平をりちてりま  
謂は仍平は叔と魏侯は是今源  
し叔と魏侯ありまは仍平は  
事はあり

辨 義 花 秘 考 一 冊

じうしんまればつりうれをとり合て

幾回末に高塩の事あり是れ時  
しり家出ししはくしんまればつり合







おろしき世にあひて孫にほく  
と徳指し給ふ事なるの徳也

うは物とおひきその世に

<sup>箋</sup>ふらうくのも成り世中し経  
おれんは事なるにうは物也むらう  
かう物也

おろし中にも

箋すおろしきりてと心し又おろ  
ら中にもけりてともし物毎

うは物とおひきその世に  
お君のあけられよ

ひらき世のよ也

又あひきん事をうはすとおろしき  
或抄下れ帯の道なるわらう  
ゆめらりてとあきんとそおふ

は袂法物よあしりなる也

箋岡は事なるの字は精く入て  
きりては是らりてとあきんとそおふ



うきとりの也

於一日二日のかとともて

箋圖を種尾中へは又字を添ひし時  
の事、掛をこり

そのかゝりありあは

箋中勅ふりて流罪中へかゝる部  
教免かとも有へし一もいふと下り  
少く朝を起す也

あふはるりに

何

我志いせしりしは

あふとつたりとふりて  
秘葬圖書等山欲と

やそ目らりしうそをいふ

何古

うりそめののりひら

をせはるりたがそかり

箋圖同去 葬 秘 葬 方 同

活の心はあつたれやとさか

同 葬

とあふふり



紫と具一とまき一とむらと  
さらさらと海し  
前、海士れあふたふあふ  
浪風よりあふまき  
面白くあふたり  
くらうんはあふ

紫事也

義史 音の字をいふ  
ふらうんはあふ

のあふ也

あふ

海のふ也

女君のふ一あふん道也

義史のふはあふ

あふのふ

ふのふ

かのあふ

これとあふ



義安源よりし年れまらりし人  
はやくに女のかしはくはくはく  
おいしき事

義同入んと源のいよき  
共なりあそがはくし人  
けいけい

義同源のけいけい  
里まきりみ  
そらけい

義同源のけいけい  
そらけい  
おきりあそがの  
ちんりあそがの  
人しおし  
おし

入道よりと物のさこわ  
河  
友意女院 男女  
入道と号し  
友原道子



之系用白頼忠女圓融院后

天禄四年三月十九日落髪世号入道宮

秘葬

菟臺乃事しふにむくりて入道宮

之男女り通して之也

物のまゝや又い

笈史古伝に伝授の菟臺此の火や

けのこまりの人伝と相通

さぬくさ妙事なほあ

たさうれいさいつれんや

湯とやいつねあり

笈史は風流のゆきを移ん

こちよさあむゆきをいさ

かとおひひや

じやうはあひお

笈史より源のゆき古伝は天と

ゆきのゆきゆきゆきゆき

けゆきゆきゆきゆきゆき

まてゆきゆき



義國今をうに秘録一巻ありて右  
つがひ書家ののほりかたの曲とありて  
とらふく物とありてふ中此巻は  
と深の心

三月二十九日ありてかたにせん

西文と長安和二年三月廿六日た遷

太宰府

高明公たた遷二月廿六日也 昇義國曰

於くされ給けり

おりのさうりーんや

松やうよ湯きとさせりい

ひまやのおさにくーいひる人もありたり  
とありてあらうありぬらんそとる

大統中二菅善相とのの介とさくしん

くさうり治る時くありまれありー乃孫

とゆり治るにひまやれおさひせ

くさうり治る時くありまれありー乃孫

歌長莫驚時変改一栄一樂是春秋



くゝゝの口詩人物あはれと付すゝては  
小の詩人白氏文集曰目口号絶句は  
超大林寺序とて人の口つゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ

日正純にハ口号とて絶てはつゝゝゝ  
ゝゝゝゝ口室をゝゝゝゝゝゝゝゝ  
或云句詩曰顔絶句にハあゝゝゝ句は詩人  
又云別の掃とてゝゝゝゝゝゝゝゝ或又く  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花

駮仕ゝゝゝゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
つれと今葉はあやまゝゝゝゝゝゝ  
昔葉相ハ物とてゝゝゝゝゝゝゝゝ  
耐ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
や且節君ハあゝゝゝけあゝゝゝあゝゝゝ  
ゝゝゝゝの始ゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝつゝゝゝくおほゝゝゝゝゝゝゝ  
故ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
のつれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

界



日

かゝるゆゑにひるひちかきまゝにほつた  
つゝ志のせむきもめれた口はつゝよゝゝ  
又花鳥ノ義別く  
ゆゑにあらゝゝゝのねんく くの物  
つひらりーかゝるすゝと皮てかきまゝ  
て源氏の所よ落ゝありてゝあり  
くくおのやゝあり

花鳥義別

秘

聖廟の由旬河海に今ゝり心ひり得  
と聖廟の心記者に作を給ふた

も末代よ跡々くはひのゆゑとみま  
君よつらゝゝのほろほ代と跡跡  
又の義はと西清島と中かゝるゝ  
しりゝゝゝありあゝゝにひり得  
あらゝゝゝありてゝありとみま  
つゝゝゝありあゝの流て給ふ

義同々を記歌を人聖廟の由旬  
りありみ思ひゝゝとゆゝんゝゝ  
ありり只今海のすゝゝゝゝ



昔君にしるひ心ひたせし人あはれ  
のまじこころあつて思ふに  
況用へるは

歳去り詩句詩より一箋史に同

初めの月日るつらゆに

源氏朝よあはせせとみくしりりあ  
ておりしあつたつておりるなり

まきおのまうして

冷の別して源氏あつらるる朝大

命ぬの君の

<sup>紅</sup> 王命ぬ也

入るるまきおのまうして

養國友童れあつた冷の源と思ひる

このあつていふとあつてあつて

に源れやうにあつたすれはれ

あつて冷といふあつたすれ

恐怖あつたり

あつてあつて



秘 源の兄弟

あはれなる文をばくあり

義皮地へ執れきり  
清きつらりるる  
すくれらつたを源の化り  
りささささささ  
のくくくくくく  
れしあり

まじりのや

秘 弘徽殿あり

おのやけのきり

秘 勅事へ 勅勅とつらり

義皮くあら字とうの假名とつけて

よしあり

考辞 日本 勅事 勅當り

あのみあららるる



おとちりつゝ家者して

養父源氏と為の極右此神と云く面白  
く此のありて可なりつゝ此のつておとちり  
とありさまにいつひもすなり

高馬といひせん人此

史記曰趙高歟為乱恐君長不聽乃先  
設驗持廉献於二世曰馬也二世咲曰  
蓋相殺耶謂廉馬同左若と成陸成  
言馬以阿順趙高或言廉高周陰中

秦始皇本紀

諸言廉者以法

并 趙高事 見の 趙高が乱と云ふ人此

と源氏の當今にうろめり此のあり  
にうろて源氏よりと云ふ人此と  
彼群臣の高は順して馬といひは  
しうてと此右の如しなり

秘

趙高より河海よりなり

義同趙高より河海と謀及の心あり  
よ人これよりひらとすなりは高と阿



順せし人おとくをねを追はす  
らしつるり私名の腹を

二条院の姫君

紫衣

東のついで

秘

くしめ源の所くつよさうくぬんし  
くしめいさうさうあし

義国源の官女おとく紫衣の  
くしめにいさうくつよさうあし

くしめいさうさうあし  
ちのいさうさうあし  
つよさうあし  
あしねいさうさうあし

かつてあしあし

秘

あしあしあし

義国は中くちあしあし  
あしあしあし

そらあしあし



秘

源の紫よんひかへさるる  
とらりとし

みづもまら

源は宮女さらののり

かの山秘まじり

とらりとし

えわんしすくはゆ

いあやむらうのぼり

源のおぼり

わつめえにあさま

源は山秘の力り

またとらりとし

めさゆ秘かし

いあやむらうのぼり

うけて源の秋はあ

けあか

やまらるる下人

ぬゆい







とらぬのへらあり

うさよにうさよとせ

河惘然不能眠  
紛々專衣雪

良清唱徳

也者白屋埋 遙知碧鮮所  
家僕早逃散 凌寒誰掃撤  
千万言無那 連綿亦鳴咽

たよ提笛

紆 民ア大痛之惟光へつねの笛

菅家

うさよとせ

深の琴よおしりさひびく

こゝろの静さ

紆 深の琴の音と感へらあり

ひら 胡の曲よつりらん

王昭君

む 王昭君胡の曲よつりらん

方ノ初ナレシ

王昭君 胡國の王よ嫁せしむ

とあはれなるれし事あはれしく

に及んをまはりしゆしん

とふしを遠あはれしん

のしぬおしんつれしあはれ



よしのちをばいふたてとあふるる  
さしこのあつたにうそをせじうせ  
とあひひるるさしうらるる

紅  
深のらく明妃、胡曲、拙のさけり我、  
都よ女ともしすを記けり、この  
葦岡、のらくあしし、王昭君、うき  
紫のよにさひるるさし、ゆら、琵琶と胡  
琴とさし、琴、うらるるひ、出のさし  
紅深のさし、人、む、さし、さし、さし

さるるさし、さし、人、と、昭君、さし、  
さし、さし、人、の、妻、さし、さし、  
さし、さし、さし、さし、さし、

あし、さし、の、さし、に、  
さし、さし、さし、さし、さし、さし、  
あつ、さし、の、さし、に、さし、さし、  
お、さし、さし、さし、

霧のほれ、さし、さし、さし、  
胡角、一、部、霧、ほれ、さし、漢、宮、万、里、月、あ、腸



王昭君朝洞御

伊約尺にハ血の海と誦  
てナ和日と云とリ  
ゆふつり〜ん女とおり〜やりて  
とあり王昭君うり〜

秘胡角一抄〜 異同

義史胡角胡玉ノ樂志之角筋の  
或抄胡角一抄〜

昭君若贈黃金賂定是終身奉帝王 王昭君朝洞御作

月とあり〜

同去月安賜といふり

あ〜〜

義史抄の抄す〜

抄の抄〜

終教林庭見青天〜

〜これ西〜

幾行南去存一斤西傾月

伊約尺 奥入云



東劫

今案尺共以不分明 莫教極芳華且圓  
三子世界一周天 天廻去鑑之將暮唯是  
西行不取遷 管家代月答

昇

天廻去 一管月の少くも 一劫月の

和

西行して来 不行くを 左に東よりと  
天廻 一月の行く由

少去左より来よりと 玄鑑と云万物  
と今あるあり

管中日月の西行は 是右よりと 左  
近上の管家の大道の右にめぐり  
うやじの左近の行へるはあり

松列光甫の詩より

世事不分明 君等嘆 試看日月在青天  
一般造化劫相肖 日月右旋天左旋  
日月の右にめぐり 天の左にめぐり 造化  
サへウを口千カイナレ 世帯中にお世帯  
は根モナク事トく 是も日月ノ西へ



約せむに旋トイフタワ

<sup>源</sup> 月を流し秋を向ひて

月を流し秋を向ひて

<sup>糸</sup> 月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

私は羨如何

れいのもも流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

<sup>又源</sup> 友を流し秋を向ひて

ひらりひらり流し秋を向ひて

<sup>糸</sup> 月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて

<sup>糸</sup> 月を流し秋を向ひて

或抄月を流し秋を向ひて



あつてこれより  
義岡友子もいざつとあつて又  
やう群をるすものこそねとあはれと  
よとひくつて我も又能はるす  
友子鳥のこゝやとあつたり  
又おれより人をもたれ  
んといねるくといふもあつたり  
あつていふものやうにちとあつていふもの

義岡希有るつとあつていふもの

家にあつていふもの

こゝに福候する人ものいふもの  
のねのやうつものいふもの 半回

松原れいといふもの  
あつていふもの  
あつていふもの

あつていふもの  
目録にいふもの  
のいふもの



延の二子よとくくみしつらとてあつらふ  
かしのくひのつらとて同のくひあつれ  
浦のよゆよふとてつらとてあつら  
やまうつらとてつらとてあつら  
うとてあつらとてつらとてあつら  
明石入道女く明石とれるくつらとてあつら  
あは良清のひ女れ事とてつらとてあつら  
事あり良清の父を播磨守あつら  
くつらとてあつら

少みりやりのたれと

<sup>秘</sup>つむくたつらとてあつらとてあつら

つらとてあつら

つらとてあつら

<sup>秘</sup>女のたつらとてあつらとてあつら

義岡入るのふとてあつらとてあつら  
ちの入るを

入るの良清よあつらとてあつらとてあつら  
あつらとてあつらとてあつらとてあつら  
あつらとてあつらとてあつらとてあつら



きりてしとて—— 美作にふらふ

しむいふらんありありと——

あまの昔の事よ——

しむいふれ

しむいふらん

<sup>秘</sup>しむいふれ事よ——

あまの昔の事よ——

しむいふれ

しむいふらん

きりてしとて——

しむいふらん

<sup>秘</sup>しむいふれ事よ——

あまの昔の事よ——

しむいふれ

あまの昔の事よ——

しむいふれ

あまの昔の事よ——

しむいふれ



ふの君くそあつて

<sup>秘</sup>源のこははよあつて4つり

く君よ

明石とれ母入道の水方へ

桐つりの文衣の水く

松是より水方に

義岡是の源へ入道の娘を

後念是の漢言程へ

らん

あとの水く

<sup>秘</sup>君よ水宿也

入道の娘は事と

母あ

明石との母は親と

さ

やん

源あり



みくし此四めをえ

義同勝月秋の事

史書同

分れしし一是昨読日并紀

妃字と今めしあり白氏文集

八十一西妻あり但さ此のやん

あ此内めしといふ知ゆくとあつとあ

んめとしつされ是一人白の故也

ひくもさるれぬ

やういふゆめしつとあしすりもさ

や此事ゆめし

くあやさ山うつ

河

史記

高祖本紀

曰呂公曰臣有息女顔為李

箕帚妾酒罷思媪怨呂公曰始常欲

奇此女与貴人沛令善云求不与何自

妾与列字呂公曰此非見女子所知也

卒与列李呂公女則呂后也生孝惠

魚日元

くくくくく



入道の腹立しりて

えきりけりしおしんこ

まけつけあふぬ

并岡去曰

養國之祖を尊にら時思女子乃

まふふよあふぬこふしけつる詞也

さりんきしり

内々まの目さかふるこいふ也

うらみしんふ

入道の祈し

まろひしつさき

内々相させし少方よひのえ又

まろひしよらぬけれじふあやと

しつこいなり

あふみせし

是しり母君れしつゆ

養國源の花よあふしつてかきす

尊しんは母君のつゆしつて

くさむしつてせしつて源のらぬ



とさうめあつてふいふあらんり  
以味をあらは後悔するやうなるり  
母君れいりつ

いっ  
いっ

入道めいりつ

いっ  
いっ

和漢文苑のた近の例とす  
伊坊物清よりんち千金の中  
とあり我國のり

河

予歴覽古今歌詩自風騷之後模李以  
還次乃詭詐徒迄之李杜輩其國詞人  
聞知者黑公詩牽流轉亦倍万觀其所  
自多因諺究繼逐征戒行旅凍餒老病  
存没別離情發於中文歌於外故憤  
憂怨傷之作通計令士什八九平世所  
謂文士多数奇詩人尤余薄於見矣

白氏文集

序洛都

漢家本朝其例多歟



野相公在細言菅家西宮左府仲内  
大臣以下拔群賢才無辜赴配所之  
月人不可勝計

小のしは君を

小方のしりなり

明石の屋云の源氏(女まの)せんす  
と所美せぬとさうめりり初大君を  
と小屋云とさく

私屋云は何るのしりなり

さうり初大

又私物志は君をさく源氏さうり  
さく初大源氏君のしりなり君を  
と所母更衣ハ入道り叔父の梅家  
大細さ女もて由緒しあつしとさく  
しりさうり義はけさ 僻業の初  
流く進むとさく

そのしりなり

相堂更衣(明石入道)とさく

秘進劫く  
は君字深  
今人さく  
しりなり  
君しりなり  
私今書院い  
さうり初大  
しりなり  
秘奥裁  
しりなり



相臺の更衣此源氏君のやうなりす  
られし西子とくみききぬつらさ  
いと引ゆにふて母君は解きせん  
なり

大后 入道播磨守 明石入道 明石上

按察大納言 相臺更衣

<sup>翠</sup>相臺更衣の父は明石入道のとらや大后  
の才女のさうしありはと光有し  
例をひくあり

やそりありはまゝしこのとりは  
す古里丸人し彩とらうしあり  
とふハ衣冠 翠白

義同様の衣とふ衣之古衣多分字  
よそりあり同はゆきうし

我為遷るは汝来賓共是蕭々様漂身  
欵枕思重帰去曰我知何業汝明  
春同雁 菅家恒集  
私心詩引は不及也



良清

うさつねじうせとあひねる  
るハケの世れあふねと

あまうさつねじうせとあひねる  
うさつねじうせとあひねる  
ていあめやうおるもあひねる  
幾回びうせあめとあひねる  
あつうえ極のえあてあひねる  
りあつねと

氏ア大捕

惟光

惟光くさつねじうせとあひねる  
うさつねじうせとあひねる

そつねじうせとあひねる

界

極厚の世れあふねと  
とつねじうせとあひねる

まけとあひねる

松

つ今極の身とあひねる  
月いつねじうせとあひねる  
今いつねじうせとあひねる











ありされと末の初は親類見中と  
すてゝあわつとてらひのれあゝま  
ありとやされの秘の義徳へ  
おわのひつらふるりて

義由又作ちち事へ

<sup>秘</sup> 深よくあひのほたてもつるへ

<sup>鼻</sup> 右近のせりうみれりへ 此作る中へ

私せきやのまゝの始に作徳分と云へ

故後これせゆて又のちひつらに

ぬてくさりしとあり 相壺西門崩

何ノ次ノ年常陸介に任せりへ

さうせられて

箋圖如いて文字の濁りひきり

おひくせり

は右近のせり親類見中と云はれて

まのわら深みの志節のくまき趣末

の巻よみせり

まゝたはひくさくつめれとほりつた



のそりしてしきりむらぬありありく  
右近きり親類とすくありあり  
下あり一版速成ちり人なれとす  
いにしよよりありひきけりあり  
ありありありあり  
菟島よりつたるとありありあり  
注よ和らけりありありありあり  
ますありありありありありあり  
月のいこころありあり

私定家つらありありありあり  
山人しきりにありありありあり  
とありありありありありありあり  
ありありありありありありあり

ありありありありありあり

私部よりありありありありありあり  
てありありありありありありあり  
管絃の遊もありありありありあり  
ありありありありありありあり



夕記月と西のりて十日の夜とて  
わしそふふふふふふふふふふ  
義同はまきと始て石山とて  
夜八月十日の夜にありてわしそふふふ  
は流るる用又ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ  
若美相の宰府とて九月九日  
の西衣八介ふふふふふふふ  
八月十日の夜ふふふふふふふ

ありしかりとて又ありしつるもの  
そふふふふふふふふふふ

殿とて西ありしつるもの

内裏の西ありしつるもの

月の西ありしつるもの

月影も露を明罷 風氣如刀不

伐然 巨集

私只あらさるる物故ありつけ  
て月よむふふふふふふふ



しせしりノホカコゴシシノミロ  
二子里外故人心と

三丑夜中新月夕二子里外故人心  
樂天 八月十五夜

山待ハ白布天八月十五夜禁中  
て對月え禎にほろり四顔の二夕と  
交質上此昔越とつひそくは白と痛  
せられろむ有達夜乎  
三丑一と赤天り伴りハ禁中  
よめの詩く品と彌一由りろり

勝のうー河海よんこり

義同同 舞同

入道家のまらやつろろ

あつがへ

花 柿の巻よあつがへ此初也秘同舞同

うらじろさうこひのうらわりののり

是ハあつがへの四入りつりたひれあつ

ハ又無別り事

ふとあつれ 花あけきつこの事にはあつらひ  
とあつてきつらんあつり



義岡をいつとせしむるのいふ新く

すまふとふ新くふいていあくせ

入新くしと

昇治氏の月と夕夜を今んとていふことあり  
そゆといふ今とをいふことありてまづし

今この中へあまのりふ地とひのあつたぬ

あつたをわくことありてまづしとせ

義岡へいふとすとの海の深<sup>千合</sup>のあせ

みる海と志くくうくうとむらりあへん

月の初ハとむらりあへん

月<sup>紐</sup>はみる程と極懐とあへん

初此と公月言にむらりあへん

義岡みる程とあへん

あへんとあへん月とあへん

じとあへんとあへん

あれはまづみる程とあへん

そのあへん

林をに穿やつとあへん

しんあへん

義岡去年八月十日あへん



の清事也

じくしれさり

林書くふ人

院よりそまうり

朱草子の相違よ似たり

おんしれさり

五年と秋信清涼 秋信詩篇拙新腸

恩賜由衣今止は 捧持毎日拜餘香後集

初之是ハ聖廟定章府より五年内

表して九月九日ノ宴、秀逸の詩と

化り給て勅録、由衣とありけり

随身してとりみてそのまて化り

久の詩を深氏とありけり由衣紙

かり給てありけり

卯、おんしれさり

おんしれさり

朱草子人の海に雲をくらす人

今もさるれといふ物信乃あり



とてさだまぬさうあはれなる事  
の次有やうにひのつとす  
鼻  
つらつらひのまをさるし  
しとくしり

秘  
海の内をいぬるのあはれし  
かきさうやうにひのつとす  
実りなる類あまうこあり

義安五年八月十五日  
と澄言ひてあひひの  
延喜帝

うしとあはれしと  
つるれは朱草紙  
出ちりのあはれ

中土捧持毎日物餘香といふ

源  
ひのつらひのまをさるし  
神れ

つらつらひのまをさるし  
とくしり  
てはうしり



さて左右ふりつり

弄  
左右ふりつり一編抄よりあり

あつて西衣と身よりつてあつて

あつてあつてあつてあつて

中と朱筆の西衣とあつてあつて

案同左右の西衣とあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

その比大貳の知りつり

私職原抄云

大宰府

常筑紫

当府大納言府

聖武天皇天乎十五年始筑紫法

西府先是有大宰府号天平宝字

二年勅法司以四年為任限

宝字十一年勅大宰任限為五年

凡當府勅管九玉二鴻別常筑紫



帥

唐名於督

相當後之位

勅任之官之多是也。有正親王任之親王任之者。權帥若大貳知府督也。

權帥

納言以上

若前官

任之中古。其例於正

帥者擬親王官兼府督人任權也。或又任正依時宜欲為大臣之人。左遷之時任權帥。雖不可知府督。凡於帥者令系所定。已為高官仍

多任雖華族又任之

大貳

正持官相當後之位下  
唐名於督大卿

近代例多以系級數二三位等任之。非系級四位又有其例。有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥。後世謂之為後例。多是以名家人任之。

以下畧之

五節の文之花教里卷。五節君源氏  
あひあひのり文の任とそ



よ路よりあり

ろいひろくじすあつらよそ

類廣

私立良君の女先中あまこあり

おれこゝろ舟よそ

義岡太氣の毒

秘くくとのわりもあはれ 梨同

私女もよそ舟よのわりあり

うしろひよそ舟よのわりあり

義太道遠の舟よ

わろいとおとあはれ

義岡舟のわりあり

道遠の舟よとあはれ

おれよれいよそ

あつらよそ舟よのわりあり

太氣の舟よとあはれ

舟のわりあり

義岡舟中よりあはれ











不任持帥派例之と大貳知府務  
く故擬以言帥歟

いしとらり形り種なり

秘 是より初之帥ハ一任五ヶ年之

私之又臺灣ののりもてもあつて

都の心ものこり

畿岡都の事とあつてもいふ所

都とて此れものこりともいふ所

と都といふはすむひとあつた

卯の事ともし

いしとらり形り種なり

恐入つたりとあり

あひとらりて形り種なり

秘 といふ人—を記せよと申すあり

てはつたりとあり

中をさむ人

都より人—を記せよと申すあり

あふといひとらりて形り種なり



あつらひしはるのゆらん

只今えあつらひあつらひのゆらん

つらつらつらん

あつらひしはるのゆらん

義岡大氣を介はまおとし

孝の道もゆきしては任府とをど

すつらつらつらん

はつらつらん

あつらひしはるのゆらん

あつらひしはるのゆらん

大氣の子

筑前守清和督所帯 守下官例

栄花物語師あつらひしはるのゆらん

あつらひしはるのゆらん

あつらひしはるのゆらん

子の産業してはるのゆらん

あつらひしはるのゆらん

あつらひしはるのゆらん



あはれものさういふこと

あはれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

はれものさういふこと

翠日



都くまむすのち

<sup>紐</sup>源の初

あひら

若志

ま

あ

ゆ

<sup>紐</sup>大

大

ち

み

飛

あ

源

ひ

<sup>界</sup>し

ま

<sup>紐</sup>狂



又せらりしうへし

源(言)終もく

やましくしての太鼓の音は  
ゆふしりぬ又志のいふ御免

私書ひしは海はあはれりあ

あはれりしは海はあはれりあ

又節

あはれりしは海はあはれりあ

秘

源の琴は高きつり

養國のうへに縁へ行くわ

あはれりしは海はあはれりあ

あはれりしは海はあはれりあ

或抄の流しは縁へ行くわ

あはれりしは海はあはれりあ

あはれりしは海はあはれりあ

秘

あはれりしは海はあはれりあ

あはれりしは海はあはれりあ

あはれりしは海はあはれりあ



いそ物と人形とあそびた船はさか  
さかぬちのさかすこいあまののりし

私言と今船中なるあそび  
名のあそびもさかすこいあまののりし

わあそびてみゆいこいり  
是の五節のあそびもさかすこいあまののりし  
わあそびてみゆいこいり  
あそびもさかすこいあまののりし

在原

らあそびてみゆいこいり  
うらさゆわすまはあそび

昇

らあそびてみゆいこいり

秘

らあそびてみゆいこいり

獨

義岡持るゆわくらさゆい

いあそびてみゆいこいり

あまうらさゆわくらさゆい

私言の文字清濁うれそ







箋同之入して京阪出給り也

いとうすたにせうら給

<sup>秘</sup> ちうあつとも奥よお立給りあり也

い弟あまうとあふありとてはく人

あふれと志のころあり

箋同 世候ともかり給少みつこついあつを

はあつこつありして給り也只今あ

ふれからあふれいさうちて志のころあ

うあつあふれあふれあふれあふれあふれ

あふれあふれあふれ

そのありのふれあふれあふれ

<sup>秘</sup> 単子地也 同去筆昔詞也

例の字或るは詞也一云式部西宮北

府のあひ人よてありしはた逢のありの

あふれをいけつとて但ば物候にあら

比 びとた府た逢の年とてあつこつあ

をり不必需事也

箋中 源の人よあつこつあつこつあつ



ふあ〜ふあともあつちほ〜くまはれと  
ほ代まで書とめてもなほ〜さるる  
たまも〜ふあは〜ん〜りあ〜る  
れ〜り〜も〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
くぬあ〜ら〜ら

二日三日〜

あは出ぬ〜二〜三〜あ〜ら〜ら  
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

〜ら〜ら〜ら

<sup>秘</sup> 秘と世と二儀也 秘の義は也 <sup>新</sup> 新と世と二儀也 秘の義は也  
世と世といふは 秘の義は也 末の初也  
みゆ〜ら

おが〜ら

幾回 葵の文大長也

<sup>秘</sup> 秘は大長也

あ〜ら車也

細代車也 栄也物活云あや〜らあ

〜車也て後にも〜らあ 師回



大后左近の時礼事也

義女 女乃乘用する車人一人、馬小  
のりて踏込る人、礼事なるは也

湯りさしとさひし也

<sup>秘</sup> 葵上此経りひひし也

こり君此湯めのと

<sup>秘</sup> 夕音のめれ也 夕音は対み殿也

むりしとさひし

義女 葵上此官女也 葵巻にけり也

わたりくくえ

義女 老らる人のひかりさたしといひ

やうり

そのはひかき

義女 葵ののりと又源の事と也

わたり君いしとらりて

<sup>秘</sup> 夕音也

きれとらりてありし也

義女 左礼に 度右とらりて



を此らとみせこれのたるとふとむ  
義く唐少と世よりてうらやも  
左氏とらや打つけら神七唐相分  
らん

久しき印に忘れぬこと

<sup>秘</sup>源の初也

久しき印に忘れぬこと  
源の初也

馬いさげた

源の夕音とつさにすし  
也源の心の中と楽してけり也

おしこゝろのまつらひ

致仕大臣

はれくにのせりらんか

<sup>秘</sup>左大臣の初源の源名せられて仕  
たにり

義中老若年が初と人の初と  
いさ源の初と若年の初と



薄かれの事りもすんじ事すと也

或抄源の陰名とてかくせしもの

めて去年の夏より三月までのも

物語の初りてよむされしもの

く井汲も人

秘官と人

茂史 是の官ありし位の事あり

致仕の辞官不辭位と階位とや

内記科おれ時の也や位位と

あれり

史記 秦本紀 注曰如淳曰韋有爵而罪

棄爵以皆稱士位とつり但唐制位

を辭とらるりもあれ 見貞觀政要 或ハ

はりさ位も位とふ事あり大位と

ハ古位星階とふ和語はけり

くわの事とふも不審あり貞

觀政要云玄齡自出居端揆十有五年

頻表辭位優詔不許十有六年進拜



司寇玄齡復以年老請致仕

わさくさゆまはくしのて

何

腰と座より官仕礼しくしりし  
のあり休退のせ

何

世指せぬ人の如くそありんば  
をのすといふた乃おろ波仕の表  
むそよりして湯指のよりと  
くまは又ありくといふた  
なとらるる河海抄の義あやまら

秘

河海は退休とあり花鳥よこ  
物も河海説も徳くさ

ひくくしうんきんまは世中  
まにしゆらぬ

義史官と辞して出仕せらる

かげらりとうりしあま

當時の政のよきは物例なり  
理の罪はあふりては法なれ

まうしをたあふ



いらいやとせの

何

寂強 伊勢物語云いらいやとせの

たんしけりあり歎けし事やあり

ゆき水原素寂云いらいやとせの

慧明抄素く急ろりいらいやとせの

家くいらいやとせの

義少 早速く物の急たつら

いらいやとせの

秘

敬密よらひいらいやとせの

いらいやとせの

義少源の事

いらいやとせの

河赤別多辱

あめれいらいやとせの

秘

いらいやとせの

いらいやとせの

来

あつまの事

義岡

天爪地



たしとあるまじき事につりさうも相  
兼西門の湯村榮耀と形りし源かよめや  
うたうらふ心ひうらめりて悲別は信官  
つし葵よれ事平々右左のねりたり

也

うづかの物語天下とさうさうにありとも  
うらうらひありしと之とき又日本紀は  
神功皇后之韓を河川新羅王の  
らうひの詞は東の日文は西よりいそあ  
まされ川のさうさうにありし川の名は

かりて星と形らんつらつら物紙  
退橋せしとさうさうこれありまき  
事のはさうさうあまされ川のさうさ  
まよありし川の名は

私に義川川はなまらさうは

いさうさうなれ給

おののさうは

とありしとさう事

秘

源の初文はあまにさうは







に  
うつゝと海い  
よのほねまの  
うらや

私うらやの官位とうれす共勅  
勅たのふ物のうらよのほのうら  
まあてのありとてはたれとら  
まあてのうらや人のまのまのま  
まあてのうらやとてはたれとら  
行の事ありとては

まあてのうらやとてはたれとら

義安とてはたれとら

源清若とてはたれとら

まあてのうらや

まあてのうらや

義安とてはたれとら  
てつとてはたれとら  
てつとてはたれとら  
てつとてはたれとら

まあてのうらや

源のいれありとてはたれとら  
てつとてはたれとら



まじりておぼやかたに能くわやくんと  
かつゝ世にのれ給ふとてはなれみ  
らりら〜さや也

むし〜の湯物〜り

秘故院の湯と大切り〜給ひ〜ま  
つゝお給也

幾度〜むし〜の湯

同去大居の湯〜給也

院乃湯也

幾回西門の湯也

おの〜ぬ〜

幾度桐西門の湯と思ひ〜又おあ

〜の事候もおの〜

はち〜の神〜

幾回致仕大居の湯の神大居の列

〜又神と〜

君と〜

神大居の〜



とふは又源もあらぬつらむ成り家  
れいつ進よてもたうへ

わ君の何れか

夕香也ははな養のひらひら  
とそらちつとそら

み

源のんかうへ

と傳あしん

<sup>秘</sup>養よの事くかうの詞く 異同

とつらちをあら

養同養のな生れ何あつたうり源の  
湯事とたけんとは

うきそみ

<sup>秘</sup>奇特ちり初也

おきかきよめ

夕香也 祖父母の中りておひ出のよ  
つと事也 養史同

るひらひらあし月日

脛近 <sup>ナツサウ</sup>



秘 源より夕音のまね給まうしうけられ

しとせ 義史同

いふへの人しゆらにちしあり

秘 左大臣の 源とすすけらるるに 同 史

秘 聖廟をよめるし 澄玄の事也

義史のしちありしありし實は犯罪

乃てしなれて罪ありしありし也

ちとるるを人のみとせしは

是は從あるしと定むる事也

うりたるひと源の極く犯さして

罪ありし人しゆらにいたるは

なりとせ

まねといひつらうありて

罪ありしと罪ありし人のみとせ

事ありしと澄玄に何事しとせ

謀及の企かすしつとせしと罪

しはちとせしと源ありしに

いふの事也しとせしと



ともな事と大臣の初也  
義史民無所措年足是は法方善にも  
悪も一方にありはせり也定むるは  
ある事よとて極の事しこむるは  
政のありと事とくも曰書み程か  
とに殺射せしむる事とてむる類の後代と  
いふしむる也

私は義史の事とて

とゆりたるは

葵と此方に

人くは前よ

葵よりうやひ一人

悪ひおほくと中納言の君

秘葵の女房也

義史ありは源乃中納言の君と悪ひ

おひせり也



以の元

笈安引寄よ及次

秘 せんよすれらふれぬふく 世回

秘ノ義同 又古方れふしあり

何 只はえにらうく妙し 身第竹の

ふと急やまれとふくふか 具平

只はえにらうねいし子にはふられて

心むしけいふかけくあれぬれ 伊格物結

人—とんあふれ

海の心々

そりまひて

中細き君とて

あれふらりとあり

秘 弟も地也 中細き君取とて

ふらうのそれよ

秘 三月末の京氣とくひ物

ありめの月

笈安源の京とくふれぬらふ大り



廿六日とみえし是の廿二三日は  
言明云友近日三月廿六日也  
みえし  
言明云友近日三月廿六日也

日乃のあつた本をのいそ志路をなす

私三月乃末此神むの本をやく

こころをそと有てまうけのいそ志

ろきなをれく落むの神みく

きりみしつらふ

うすく穿わらわ

義史のあつた本をのいそ志路をなす

穴乃懸くうをなすも又根量

り穿と有へ

秋乃のあつた本をのいそ志路をなす

義史のあつた本をのいそ志路をなす

又い時節は氣氣乃秋のあつた本をのいそ志路をなす

ゆえ

よみのうらなは

義史のあつた本をのいそ志路をなす

遠くのあつた本をのいそ志路をなす



又たいめんあつんこと

秘 源のちと泉也

うしもつそそれと

・ 義安中納言君細く心安達源へ

さるゆちりしむるやとくしてさる

源の後悔也

物しとちくまはれく

秘 中納言君たさ梅也

わの君の湯りあつと

義安夕方の乳母也

言の湯りまふり

秘 大言より也

はせりさし

義安宰相君て口つゝの君也

ふつゝもいさあまかりさる

秘 これより大言より詞

おつゝあつせ

秘 世伝君の湯り也



やまこやくらの路火大宮湯茶面  
をぬりし也

さむくしりららののこ

茶乃上れまうまは世あひくふ者  
まーさひし

秘 茶のませよはらりらとせ

養安茶のあしーまし何や又世あひく  
りぬるの時よのほくらのりらとせ

んろーさひみのいさひたがひ

秘 夕音事や夕音よいさひあひぬ

志久

うらあき路て 源

源 夕音を山りえー糖まあふわ

あまの志かやくらーいさひ

秘 奇特なる糖也茶よは志さひは

さむくまてあひはの浦あひり

秘 多敷山乃糖ハ茶上事也

高公如朱元 養安りえー烟ハ茶也まら路と志



ひそ烟とらひのひそ海士の場やく  
ひりとも後成り室八崎れ方し是より  
よもふりや西よりともあるとら大宮り  
ひそ事しともさしひの路と也

あうさのまうれりりのや

<sup>秘</sup> 宰お君よの路と也

<sup>記</sup> 江文通り別賦云黠然銷魂者唯別  
而已矣 <sup>秘載</sup>

いほれかかわれといふ

<sup>秘</sup> 宰お親へ 異同

爰やわれといふ物いづともう路物也

その中にも今朝のやう形り別いふ

あひしとも也

あひしともおひり

爰や宰相君のさゆ也



とていふもやうに事なり

<sup>神</sup> 大空へ流の如く初也

たにもしもかれ

幾度あまたありて申すに申すに

いふにすいふにいふに申すに

うへ

いふにすいふに

幾度又々吾とていふに申すに

とも加ぬに申すに申すに

いふにすいふに

幾度あまたありていふに申すに

うへにすいふに

扁鵲 莊子 仁なき物ハ虎狼より

物なりとされしにわれ知れぬとていふ

仏涅槃乃時ハ虎狼も也とていふ

ていふにすいふに 幾度同

<sup>花</sup> 一本おに神なきとていふに

いふにすいふに



うらまひを

向してしほけゆく

秘

葵乃人々くは源氏元服はるり

見えし人々ちり

いさよまてとらふ初よりてせり

たどへおん

あそ人あそ

むしひらむらよこ

ゆらや湯らり

笈史前源氏歌宰相君てさ

たふ大言人みけらやうにの

さあしむこれいむあそあそ

あそ人れまうわいしん

煙とありしや井あそ

いそ歌面白くしんらり源の

引らり

秘

多部山乃也歌大歌のらと

ねらり人のまわりいそ



叢草是の煙の立廻りちりかへる程  
おろし指落くすい鳥籠山ういしを  
くちりんとてをわがや  
とりきりてあふれのみ

源の只今の別よ夢の上れ  
とて

ゆいしちゆとてあはあつり

養上り人くのみ

あつりあつり

二条院へ

わが

二条院よと源のつとて東の

ゆいしちゆとてあはあつり

源よまらあつり

ゆいしちゆとてあはあつり

まがひ

二条院へ

叢草二条院のあつり



臣家もたつたすあともある也

心まうけして

海の西と東にまうけしうりせ八人と  
前よりあり皆私の家へ用事なりと  
おろし人あり也

きぬ人

海へ乗りかき人しとうありれいせ紙  
くくりて誰も言さず

じまうけのしんあく

義守門前岩落鞍馬掃子車れ  
ぬりもあはれは物清はあはれなり  
なは馬車うすしとあり

せうき物たりのなりと

海の世人のしんあはれ也

たしんたしとくしんあはれなり

秘 處とあり 異同

花 臺盤のあはれにあり久しくあり  
まのかりに塵をとり也



たゞとあはれしくひきかへし

義安は是の古来の不審と可なり  
事よしく有るはす共何れなり  
と云ふことあるは

今程にたりしはいつにわきゆん

後成り あれは秋の夜とあれ  
あれゆして清くは露の夕言と  
とは心みたり 義安回

あーのこころ

<sup>秘</sup>はふとの方へ

あゝあゝと泣きつれ

はふとれあゝあゝと

いまぞお記さなく

義安 昨より日々にしは源乃湯

よりいとおぼし

年月つては

義安 海の久しと 正國 始り  
ありんとおぼし



うしとある由

秘

平生いかにのりまのいふに  
うけとあられたる也

ふんはふん

義史源のいふに源初也 秘

志くくはふん  
のゆ三位中おたし  
あけしふん  
思くふん

思くふん

史史葵の方ふん

くふん

史史史史

史史史史

史史史史

ふん

史史史史  
事史史史  
史史史史



しつとせしる

ひらきこもりあそび

秘

舟と遊ば

義支何らこもりあそびこもりあそび  
るやうのあそ

舟書ひこもりあそびこもりあそび  
こもりあそびこもりあそび

私わりのあそびこもりあそび  
事よこもりあそびこもりあそび

そりこもりあそびこもりあそび  
こもりあそびこもりあそび  
こもりあそびこもりあそび

あそびこもりあそび

舟の中綱を君とあそびこもりあそび  
下にかこもりあそび

私と遊ばる

こもりあそびこもりあそび

秘

舟と遊ばる







なるそやいぬよはなるか祖母ははの  
 一父文(は)とつて一あつてさり  
 一たり又まほしか細き心金源(一  
 たりはといはれはあつたりせうた  
 てまうしあめはつ磨れつちいのかあめ  
 うとくしりー事、源の後まをえ  
 ま根や源の姓は源か西あまをえあ  
 人乃ちつにむかひかめいー

母のむかし

経  
 父乃父文人乃あつてりて作物いあれ  
 ぶあつていあつてあつて中つて  
 ちあつてあつてあつてあつてあつて  
 海へあつて

人乃あつてあつてあつて

家乃あつて

中つてあつてあつてあつて

養あつてはあつてあつてあつてあつて  
 たりあつてあつてあつてあつてあつて



町の事と云ふこと

秘

海の内へ入る申すは、（文文）志され  
しりてあると物なきは、あつた

・あつたは、しりて、ひめ

美史は、乃、継母れく、ひり、と、又、俄らり  
し、と、源へ、は、乃、わり、終り、て、後、夢、と、か  
く、平り、終り、又、世、人の、立、り、終り、終、り、と、  
と、夢、ひ、り、と、源、れ、は、是、前、と、中、と、え  
られ、今、は、家の、源、れ、を、臺、の、根、ち、り、と、え

あつたは、しりて、ひめ

か、と、く、と、は、祖、母、母、と、中、と、く、わ、り、れ  
終、し、源、へ、あ、ひ、ひ、を、ま、つ、り、て、と、終、り、あ、つ  
た、い、と、ひ、を、え、終、と、あ、ひ、り、と、又、祖、母、か、く  
と、終、り、終、り、と、終、母、乃、と、お、く、と、と、え、あ、つ

い、ひ、り、と、終、り、終、り、と、

史、史、終、母、乃、と、あ、り、う、と、と、終、り、終、り、と、  
終、り、の、ひ、め

あ、れ、は、り、と、と、と、と、



<sup>秘</sup> 宗乃こころしをうけり 始くあや  
げあそあられり

美史系系地

私守あそとる 御下 結母たふとく  
今いふあむ人たれをえ

新世ー つかえれり

<sup>秘</sup> 源氏祠

海の祠 今 宗成とあひりー 始く  
うとくしこり始

美史系系乃 ぬりあへり つかえれり  
とくし 祠也 又 宗成とあひり 始く  
子孫の 始 事とあれり 始く  
今 宗成とあひり 始く 宗成  
乃 祠也 年月 始く 宗成とあひり  
宗成とあひり 始く 宗成とあひり  
宗成とあひり 始く 宗成とあひり

宗成の中

<sup>河</sup> 宗成とあひり 始く 宗成とあひり



せりうと事それとていこうん

私義史秘いはれし「」方ぬのま

共い好ん任る死あつりささこいふ

下りたし又ハ隠居しきり人し

きぬさひささおちりささこいふたし

あささう好る月日のひけさよ

ひのぢな又とあ人し

私共公衆のろろくぬ事とていれ

禁秘御抄云

勅勅 無同情不見天氣因門外

無他云々

是ハう除名るとにわしハ勅勅

りのる人

あむまらあむい

義史花罪あけきたる前世を定りし



事不<sup>レ</sup>果<sup>レ</sup> 凡<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>やうに  
流<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>  
ま<sup>レ</sup>—<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>—<sup>レ</sup>配<sup>レ</sup>流<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>  
及<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

ひ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

策 策<sup>ノ</sup>是<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

<sup>秘</sup>又<sup>レ</sup>是<sup>ノ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人  
あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人  
あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

<sup>秘</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人

あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>人



秋  
深君ふりて平翁を月ありて

じとん乃湯あり

15

平翁衣衣成去り雖非函眼教  
班宿老公卿やとる常着くと源氏  
も女友位し人との著し死

義國之文の去衣ハ常ノ後ノ文死  
又平翁死只平翁死へ——末まがり  
のちゆらあり

おみやをぬり

源のさゆ

あふらりしと

源の初はありのゆ

このけり乃やうや

義母鏡ふりて人のかむと氣く  
しうつる物とれたは(ま)とひゆあり

やと悲ひし

源のさゆ

源  
身はくそきほへぬま君あり



さしぬ流のつけいんるわ

秘

鈴鐺 サスラフ 注行不正也又流浪 モサス

仙源 伶偶 又龍鐘 タノヨフチト云々

サスラフ下字云々

美安 カハカク のしく流る カハカク

およあ カハカク と立く カハカク

乃 カハカク けも カハカク 手 カハカク 踊 カハカク りん カハカク と カハカク

カハカク

は カハカク ら カハカク して カハカク も カハカク 流 カハカク る カハカク に カハカク と カハカク 事 カハカク り カハカク 物 カハカク あり カハカク

く カハカク み カハカク と カハカク ん カハカク も カハカク あ カハカク る カハカク と カハカク 事 カハカク あり カハカク

美安源のちよ流のつけいんるわ

あり カハカク され カハカク 事 カハカク 流 カハカク る カハカク と カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

り カハカク と カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

り カハカク と カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

く カハカク ら カハカク ん カハカク ら

美安 カハカク 心 カハカク あり カハカク の カハカク や カハカク し カハカク 仍 カハカク 柱 カハカク の カハカク あり カハカク

あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

は カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

今 カハカク の カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク

美安 カハカク 心 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク 事 カハカク あり カハカク



く居居のみさなりこの征所と又かきう  
いあーい葵の父おくにを治し河の  
さきし同し根あるなれいあせをぬく  
花敷里のむやとけよ

是の女御乃中し 車同 治のむらさき  
細くをうつ連治ふる人

かろ人も

<sup>秘</sup>是のむらさき人の事あえし 車同  
その根ハ又

葵の父大臣なる人ありしり次乃根也  
いし物うくそ

義史のむらさきへおろしあふれを  
いし物うくそ

かきつらんもうふし

史去の弟子地し 女湯れちいあせ  
押せくうあせ

いしみくくわとこ

むらさきの押く治めりあせかたれて



流りしとわくせうん可くおほしやう神也  
飯のうらりしとほろたり

兼史 花菱里の神く 前もあり

月おがろり

月おろり

池のうく山木あうらわたり

兼史 赤のふはふ今任くおほし  
思いやうらうらやうれおろり  
めあさうらやまうて都のふれ海つ

いおんといやうらうら  
不及引前兵強者 始りおほし  
あおそい

花菱里よのこ也

か

兼史 赤のふはふ今任くおほし  
さうおろり

し

うらあもいおろり



兼安源乃多也

おさうりて

らく源をすらうらふらふらふら

やそ月とそそ可んん

<sup>秘</sup>花あ里と此用とゆつとゆみ

兼安もあ里とらららら新こら

福の書も本下とやりゆへい又そ

おんんといふ人のゆり

あに山物清りのかた

兼安書ゆの年より人として山物清

いほくもそなうり又あにゆ

里のかがたゆいゆら

みーの教たやや

<sup>秘</sup>源の詞

いほくもそなうり

<sup>秘</sup>兼安もあ里とららら新こら

福の書も本下とやりゆへい又そ

おんんといふ人のゆり

あに山物清りのかた



幾多きく流よつづ年月此程と  
又ふんしちめ是よと悔と引  
ちり及る

きししりさのあしに

幾多飛あししつふ事にあつ  
あはの例あつさあとの路也

何れくはれとあは

私云は幾法物にほせは業しよん乃  
とあはのしりつれとあは  
よるにたりあは事にあつ  
あはらんあはのしりつれ  
りあはしとあはしりつれ  
とあはしりつれ

よつづえ

幾多あはしりつれとあはしりつれ  
あはしりつれとあはしりつれ  
とあはしりつれ

あはの月しりつれ



源氏乃月丸入るるは乃まぢりいをもく  
例のよみ毎秋のいれ又花鳥よみ中細之  
君の別乃時辰わたり

私秘ノ義事ニ同ク致抄ニ流花鳥流

ヨリ

義事是ハ源乃山身此神と云く月  
いふか少也花鳥流あやまなり  
同云月乃西入るる源の折は此と花  
只是西のりかた迂と若草此流詩あり

いふこといふ毎秋の義く 宗祇流  
三葉文よりとり流り 時中細を君  
別流り 時乃月丸光思ひまをり  
あられなる流り例は月丸のいふこと上になり

あられなる流り 秘 義事

義事此流りいふこと上になり

あられなる流り

何古 あひりあひり物あはれの神  
あはれ月丸入るるは乃まぢりいをもく



花菱里上

秘葬川河同 義守河川河を面白く

月づげのやちたつ袖いせくくとも

とせそりみくもやあぬひらりや

秘

花菱里の上れらのうらびきてよ海

ささぬはあともみくらり只今の別れの

おーさくらをほくとも世にまかり我較

あぬぬ力にもは海の世光いともてとこ

てもみくららりーくよのほわの女あつと

さぬはくくわり

義守めーせらのくくくすくいにあつとく

只今乃月紙せくは神乃海ーか

まもそのまうーうめうはと月紙

海ーくくくわり

みーとお母いーらり

花菱里上りゆゆーは別とうわー

お母をまうーさあはくくくさめはあや

石原  
けりめくろはわーすむくく月紙の

まーくくくんをれたーあて



女君はかへりてあひらきやうと立向はれども  
 義安月はと入てま又つてくもりてと  
 又晴らもの入深れ方上もかくれくむら  
 一とあひてあてふみりあて  
 夢のいふやうきぬ海のいふ  
 何はくされとまぬ海のいふ  
 たりあゆみよあひらぬり

秘に辨し 川を同じ

私はゆかりつわいよとじく月を見  
 せと夢のともけり流と志の海を見  
 けり流と志の海を見  
 くれと志の海を見  
 かくのい

ちあいのゆき  
 義安とゆいのは月とく又流と見  
 ちあいの事  
 ちあいの事  
 義安とゆいの事



しうて涼を云れんくと涼は終り  
とめしつゝもれ又跡も跡しとる也  
との事しりおこあつて

是ハ涼よらうまうんきんくく  
はらまに志さうひささあり

涼り仁うーちり人ト一惟光  
良清以下也

山さゝの涼まみれく

箏や弦構ちり道具あらわはる也

ゆらりて叶くあ物くうりり也

あや也

よそひちくやけ

箏やちりやも藤おあしとる也

弦梅ちり物ハ女位の人又やうの事

似あはれくしりしくみゆら

弦しあや也

又集りしりらるるこまてハ琴の事

漆琴一張儒道佛書各三兩卷樂



天既来為主白氏文集卓堂記  
白系天の詩賦をわひりて七千二巻  
あり長慶集とあり長慶年中に  
わひりてあり

箋史昔ハ唐人の詩集ハ卯ハ  
より一也と外ハ後代ハおかく  
わひりて

まぬくくありて  
是ハ源のくたきぬく

あーのさ

秘  
あよ

箋史終の事ハわにがてはつき  
源のあハ源也より四方の人  
とこれあつけぬ

まじりしあし源さうみ

秘  
領給源庄西牧  
皆不飲也

あーのさ

河  
卷



秘 券と支池ノ由 斐幼

兼安券ハ支池ノ桐沙門ニ入り  
能ハ流つゝ下流中ノ券なるハ

みくゝ

兼安流ノ流ニ至リて入ルル所ニ  
女御と云フコト也

兼安流ノ流ニ至リて入ルル所ニ  
ありては流ニ入ルル所ノ家司ナリ  
をくゝ入テ極新トモト云リ流ニ入

と云ハ作事ナリ

志アリ

兼安流ハ大所ト云フコト也  
家司ト云フコト也  
兼安流ノ流ニ入ルル所ニ

中務中納言

秘 皆流ノ流ニ入ルル所ニ

兼安流ノ流ニ入ルル所ニ

つゝ



後中務中侍皆源のつらみは  
つらみ

何事よはげして

後中務中侍のつらみ(ま)  
ていあ〜つらみは源のつらみ  
つらみは源のつらみは源のつらみ  
つらみは源のつらみは源のつらみ

のらありて

<sup>秘</sup>源のつらみ

ああ

<sup>秘</sup>山の方へ

かみとれゆのつらみは

源のつらみは源のつらみ

いなり〜とみは源のつらみ

つらみは源のつらみは源のつらみ

の〜つらみは源のつらみ

わ君のつらみは

<sup>秘</sup>宰相君は



夕音れめのことありて

むらふことなし

女声又花衣里よもてありて

おしきしり

美衣又のしきしり風流りてありて

そ外まゝ実れり流るれりてありて

こ流りてありて

内侍のしきしり

女声(流のきつれりてありて)

かりりて事みれりてありて

あつりてありて

とくせりてありて

これより流るるの詞

いさよとせぬるひりてありて

秘 勝目知りてありて

あつりて流の川よもてありて

あつりてみおありてありて

秘 勝月の音のありてありて







面白く海をとりあり只海よりせり  
也此名も流れ流のせりよるよる十流也  
此伊勢とぬらぬるも書之傍成り女  
は神と地帯中一考也と申されり  
伊勢わたり川の神よりなるれ  
とありとてぬれ力ありとあり  
水尾 可 水深 日中記 激  
つみのれ

乃此伊しあやうされ

はん方よしを突れわうに海

あしり

女中つみ

鴈のおしひをなれ

片し川うふりれとて清なり

あはれそららの日成もゆき

河 秘

水清く あり廻る者別のあり  
みあり 水清く











あつさひけて月つるは

定家のはつとていふは秋田

長家ノ百首

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

<sup>秘</sup>定家のはつとていふは秋田

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは

あつさひけて月つるは



いふはなれまはり

源のほくくちをへ招きあつたは  
めつひつねをさひくはれ

中へはなれまはり

中へは源のちよめめさつた  
たへおひひはあつた

源乃初也

あふたまふちり

安まあつた入密通ありて冷れまれ

源乃初也

富乃清代ふに

<sup>秘</sup>長文はゆり

私をへおき病へさしつた

天通よりりみえさやりのゆり

親身とのかはれ物へあつては冷乃

由位よりつたゆりへおしふ

富乃初也

<sup>秘</sup>是のあつた



あさねのつらき

さゆくはるはる中におりてはく

つさねありておしやうてふえ

湯ニ山ニよるりつる

山ニ凌りとる也 昇秘同 海の綱也

とみよ物よさるる

菘つかののじせ給らる也

みいれいあつあつとせれを

そむいひもたるとさあ

何れ

あつれあつあつとせ中小町

いれいはれの目まをけり

一勺の故流二勺の流の事也

私をいひいひい世に

まもるあつあつとせ

いれいあつあつとせ

いれいあつあつとせ

秘

あつあつとせ

あつあつとせ



つれ<sup>を源</sup>にありていふはつれありて  
又そこれ世のうらなはもつれから

松桐西門よりつれもし時ありて  
いふまじりけるに又つれもいふ  
ゆゑ別よりありけるいふ世の  
字の心あるる僻果れ新説

月の中らつそつれあり

眺めて月出るとありは

字も眺めて月出るとありは

よありて月の中らつそつれあり  
てみるありてあり

さつちの事つれとありしもの

<sup>秘</sup>さつちの事つれとありしもの

は奥よりありて花ありに  
せありてありてあり

或抄よりありてありしもの  
さつちの事つれとありしもの

右近乃てつれあり



秘

中川の紀伊守の身侍守の子系圖

アリ昇回

葵書は源氏は祿ははくしうもり

日より此は身侍一人

入こころなりと程す

源の家人なりふりて也

私六位花人の内身一と極簡と

いふとれは毎年此叙位一人つ叙爵

すりて巡爵といふ也

みろさけつれ

もと除籍といふ籍ハフダ也殿と人の

四位六位六位まで昇殿すり程の物

と日給當といふ物小書はくもをれと

はつりのくゆり

はくさしとれ

解官停任也

湯とのにわつらり

右近の藏人の波戸一と西佐の物也



のちれんやとろ

下鴨西神社にむかへれんやとろとふ

紀とつゝ是也

ありて湯馬乃口伝らる

右とのせうれ我馬のかりて源は

馬の口伝らる也ありしを是れ目とつひ

出し也風流らるる也

ひさつれて養つてしそのつと

かへははししやのつと

秘

神もつとあつと

まにつとあつと

源のつと右近義人つと

人つとつとあつと

をあつとあつと

神

辞見 日記

賽 ころし 賽張く 報其可祈也

先代切



源

うゝ世に今とてつゝとてしむらん  
多とてうゝの神は留るをて

あまのあまのつゝとてつゝとて  
うゝゆりしむるをいふはつゝとて

神のは名よゝをいふ

物ありてつゝとてつゝとて

右近の藤つゝとて

あゝゆゝとてつゝとて

清（源のまゝりつゝとて）お流るをせり

事眼あはれつゝとてつゝとて

つゝとてつゝとて

<sup>秘</sup>十善帝王の位は生れつゝとてつゝとて

行ゆつゝとてつゝとて

あゝとてつゝとて

源のゆゝとてつゝとて

つゝとてつゝとて

源の事

ゆゝとてつゝとて



河

古墳何世人不知姓与名此作路傍  
土年々春草生

秘

古——と樂天々作わらううひて面  
——と昇同

あり——作ありけ

秘

もかろくれくも

そろえじきかた

身の毛くけ振あり

養少 酒漸 酒 惡寒 惡風  
ツクサカシ  
サイロツ  
シヤロク  
ラカシ  
ラフ

已上素同経

源

かきくけやいうみんくま

あつしる月とそくくれぬ

秘

あつしる月とそくくれぬ

いし細糸とゆ流すうにう月のう

とらのおあふいさうあはてあつが

空通のうとあひりあつ—— 昇同

東文あもひせうし

あつしる冷へもひせうしそくりや















秋  
花の用落を源の榮辱は法とらえ  
又いんまをうねりすといふて 春日

私行の言ふふ品と言ふ言ふれは源の  
知くおれ給ふと入ていり喜ぬ  
花の時がおれの形紙の形とて  
お立ちのり西流とてと候ていりや

時—あらん

花  
春  
花  
花は初有へ—  
引おちあらんといふや

秋  
時あ—おやそりり源のらえ

名  
名は—あられなり  
今時のさゆえ

山むの有りり給ふとあられるれ物  
ともして来たれうら悲ひてあけ  
くさゆえ

一  
一めとんせり

徳一爰しみをり—  
あさみ—







いさよひいさ

はふりりあまのちかかろはるは

<sup>秘</sup>皆海の内やうのまのまのま

秘はくろのまのまのまのま

かほくせろくも

是より物判の人は海をかみ

まのまのま

<sup>秘</sup>は除名の事能くもくもくも

あのみま

あはよかりあひこのまのまのま

あよかりあひ

或州之海の西より十字<sup>字</sup>に入あて

りりこのまのまのまのまのま

まの物の分別あつるまのまのま

秘ははまのまのまのまのま

のまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま



つれづれに七歳の程よりいつねと内  
裏のこころをひろひみとみくらえ

この世にさうりた

心 ほんくくよめゆえ

源の中くに往くもあつりし事

やんとおれさんうらめ弁官

つ建も官位たし事につきては執

奏と頼るあつ

うーあつりてつらくやまむ

右后のつらくやまむらりて源の

徳と忘れらねたゆえ

世につりておれ

心 けらふれ日死云西ふれたれおと流

えれふとなんそあめめ志す世と

つそあつのおんくつ

まらゝ動いふ

かどすそくきふひもつんはしゆれひ

世れららぬるありてと源



の西だよりいあひあひとささるる

しりおりの人よ海く

秘 せああひん

し海つふはきをそひ海と

海の事也

その日の女君に海物借

秘 は日未下向し 昇回

しり北西をわし

海乃接のささるる北西也

月そにさりか

秘 しりそにさりか 用去海の初也

いしりそにさりか 事あか

あかわれはてやそ又の海つさの

おひくはし心事伝ひのそそ

て海のあひ初也

わがたてくそにさりか 事

海の事しあひるるさ

おひしりそにさりか







ろしつる長お母つばし生別のあり  
多紙志して命紙つらりて誓なる  
いとらぬに事乳とてなむと出たの  
おひとたつくさあてあ紙つらり  
やうにのぬいあつらるあさつらに  
中ふふふつらり

<sup>在</sup>お

おしつらりつらりつらりつらりつらり

<sup>秘</sup>

おしつらりつらりつらりつらりつらり

あしつらり

私おしつらりつらりつらりつらりつらり  
命紙つらりて契とらりつらりつらり  
しあのみ命とておしつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらりつらりつらり  
そのおしつらりつらりつらりつらりつらり  
生別をせつらりつらりつらりつらりつらり  
をらにんてあしつらりつらりつらりつらり  
又先年三光院内府御百を和



の門扉居のらとけすくゝりて  
あん秋此契ふくてあのみかの  
居れつれはなうあてーれ  
夕ふさそおほくらん

雲のら中ーまもくはあはくあし  
と察しーあつる源のら中や  
夕それいつあめめ

源の出京の御入は程のあへんま  
ちんさとのあつる御ーあめかへんあへん  
つれあせり

西舟のりあめめ  
<sup>舟</sup> 淀川よりあへん  
何れも署し

日あつればあれいなる風えそひそ  
<sup>秘</sup> あまりに早速あつれん章にのそみ  
ていふやうよくあつれあめめ

あつれあめめ  
<sup>舟</sup> 一日に彼浦と下志のりあめめ



事のや又ちやうに去侍る也

安虫追凡やあふ勢くつと終る御也

或抄に日あつるはつりにまの風きんそ

ひてとそあつるにまはあれやあり

是物語の去極也

私云とい凡きとひて日あつればあれ

ゆこさうの時中とつり初るなり也

しりそあれなりあてしもうらこひと

好活なるの事につきてさやの極也

いあひひねるぬにまていひてまかた

さ向あてす向の浦へつらひのあふん

中ぞしとるれとされとあつるの如

くあひひあつちうとあつるつと

おぼとせ也

・おひさのこひひる前ハ

母王瑞京の時作活とあて大和路

とつて括津園におひひきて難波よ

てはとくありて七日に大和の儲前



よつとあふ十日に入京志あるも亦大  
江原ハ母文帰海の時此後館之を  
よ松より志るに此なる也  
母言帰海の時此後館之を松  
より松かよと志るに後として都  
入京も亦一代一度母文の松館を  
れハあきつらしつるや 辨日  
後拾遺食羅法師言づこのや志る  
さうじやりしてや丹とある仔細なる

とあり此亦見但松よりそ志るかり  
なるとしつる定て有古言れ  
一劫一説云流色橋東樓居と云  
可者此亦よ駸橋と云の事  
<sup>源</sup>く個小若紙紙くく人いりも  
り来志しれぬとい井とやせし  
<sup>同</sup>楚屈原くくあつらひ紙いり也  
楚辞漢文序云漢文者屈原之所作  
漢文雖俗時遇屈原怪而同之遂相直



昔屈原沈放身舟遊江潭歲水側  
行吟潭畔履荆棘 顏文樵梓

杜詩注曰屈原有宅在歸州漢郡  
國志注曰荊州記掇歸縣北一百里  
有屈平故宅方七頃累石為屈基  
今地名樂平

也 河海に楚屈原の江潭に流されし  
事いらば志たされしいは海に流れし  
事いらば志たされしいは海に流れし

秋 河海屈原といひりて人々いはしめし  
昇 屈原の事と云ふは楚屈原の清醒いは  
源氏の力よはしいはしめしいはしめし

河 河海屈原といひりて人々いはしめし  
昇 屈原の事と云ふは楚屈原の清醒いは  
源氏の力よはしいはしめしいはしめし

秘昇 河海屈原といひりて人々いはしめし  
昇 屈原の事と云ふは楚屈原の清醒いは  
源氏の力よはしいはしめしいはしめし



秘

うれも志のりりあるとわれと深の吟  
しぬみ殊緒たりと也

專

伴惣物語のやう思ひやうもし業平  
接納の時詠はあ事あはれとて  
たねとわれありとて今源  
氏の吟しぬつゝハ又対勝とて

まこと三千里の御礼つらとらに

16

十一月中長至夜三千里外を遊人  
若為拙宿揚梅館冷枕草林一病

身白氏文集

伊りん

三千里外随行李十九年回任轉蓬在昌後 藤氏

舟

三千里外随行李一浪まののかと十  
三千里外随行李一浪まののかと十

しりもやそんあはれたり秘同

秘ハ二千里つらとあり

この志つくとて

17

このゆかりありとてあはれたりとて  
とわらふあはれとてあはれたりとて

赤人 業平











わをいひていふらん

はたかにいふらん

ありしとあり 秘用

ありはなる

もろのいふは命いふゆ

いふありあす

義国をいふはありあす

ありあすといふは風流あり

いふはありあす

果

飛あきて配ふは月夜いふ

いふはあり

義国曰秘用

は初歌基中細きの語といふ

結は見え及いふ

ちうさといふはあり

義国源の領を知るはあり

決りありはあり又忠告あり

秘用ありはあり

ありはあり







養圃誰かみこと

志のひてんせ

胡家とおそろく放せ

志くぬむれんらして

養圃日本の内あすす卯玉のやう

ふりやい貴玉のころし

ひれんらして

これくしゝぬらん中にあるや

とこころけやぬ折あつて

いつて年月紙さき海と

年月を送りぬらん折あつて

おぼくろふ海の中は

やうく事志のまら折は

は折はし定りぬらん折あつて

しすゝさゝら折あつて

あゝむれはよありて

ね 友くちりて

養圃 誰かみこと ありては



ほのろあゝあゝ

京此事はありや

困たうはとも井此長ぬの時ふれ深の  
いん中おしひかりはねてはらに  
かゝぬ人れうらゝに程さう  
らの志あまされいさひそさうの  
是いまりてあさく

女君のおり

あよとん

長高れはり

冷泉く

わら君

夕音く 何んもれく海くむつね  
し事く

二条院へ

あよとん

あよとんの秋の物語よのせはあき  
よや但あよとん事へ下へ



入道言

薄き女院く

かこもやうな

い二おし別

くきれまうり

義岡海

言

秘 薄き女院也

原 松志まはあまの

頂磨乃浦人志や

秘 松志乃あまの

あまのはなれ

あまののら

あまのはなれ

あまのはなれ

あまの

義岡松志の

くた



海士と云ふよせり

私柳喜に西院の座のりと私と海士  
早彼座の候儀の西女浮祢の座と云  
つゝ先帝は女初意帝の座也今座  
よかの座人の未世り西院の座と私  
うゝ海士の海士また人てよわれ  
まゝとてく准しをりとおる又  
と云ふ人志の座の座と云  
と後如の座よ

五月のうゝく藻北煙うら志り  
志の座れまゝの座の座の座人  
と座の座の座の座の座の座人

いつと傳々中にも

文の初也

美岡石の座をとりて志の座と云  
又初へるり座の座の座の座と云  
と中に座の座の座の座の座と云  
と初へるり也







月より初とある用事し  
凡中が派となりて  
その心切りの家し  
方々の心のりし  
証せん事ハ席に  
ちんちん

内付れこのは

勝月夜

りさし事れやう

細

勝月夜のは

中納言君ハ勝の女房源の心  
そのしこのやうに志  
勝の又あり

中納言

勝の又

つ

細

是より又の初

源勝

まりす戸の浦れみ



志知なくあまやうあまやう

源のいらいらとあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう

あまやうあまやうあまやうあまやう



大般 皇 大后ありんともち殿といふ  
ありり如何 一劫 ありりとも通判き  
何物と大般といふありとも分れ  
宰相れめのともあり

夕音のめれとも

私大般あり宰相のめれともふりとも  
ふり大般ありとも宰相君のとも  
ともありともあり

何ともありともあり

夕音へ何ともありともあり  
つらつらともあり

義女海の京への文もに勝月夜  
若つがや人の文れやうともありとも  
出るとの文のやうともありとも  
事をもありともありともありとも  
ともありともありともありとも  
ありともありともありともありとも  
ありともありともありともありとも  
ありともありともありともありとも



京ふいひゆ又さちくくみぬつ

物語の面につらあくくお外に於

あまうい思ひはく又つらうい流るお

おぬれくしきみん

ニ東院の君の昔ゆふおぬれあがり流る

あまうい流のあまの流るしきおあ

しあういすきおあはくく

あうい

箋圓細く ちんちんちんちん

らぬく

あうい又あうい

あういあうい

あ

あういあうい

あういあういあうい

あういあういあうい

あういあういあうい

あういあうい



甘ふきくくくくくくくく

義國海くは母くあくがくりく人の様

くはくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくく

少細きくく

義國少細きくくくくくくくく

あけくくくくくくくくくく

源氏のくくくくくくくくく

城くくくくくくくくくくく

く思ひて行念をくくく

少細きくくくくくくくく

くくくくくくくく

婦

くくくくくくくくくくくく

のくくくくくくくく



るいあくおかりみはくはくきりあし  
らあひあつら

義國ニ多ク新念よりあつら  
きくいあひの身は上の新くあつら  
せの涼のうらほいあつら

新りりあつら  
信都のらあつら

たのほの井あつら  
あつらり涼あつら

義國常れあつら物、袖をく長紐  
れ寸はありて女のと男のとあつら  
あつらあつら常の衣被ようあつら  
あつらあつらあつらあつら

かどりあつらあつら

縑衣 縮とあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつら

平縮の衣あつら 衣あつらあつらあつら



夏秋の重衣年齢にりてうすまあ  
るは冬は白く指貫さ年一りて  
わらひの浅深ある也 一劫  
秘  
平緒とし涼衣なれりこころに入  
こころのりいりいりいり

義同平緒のりいりいりいり  
のりいりいりいりいりいり  
思ふつまひ也

きりきりきりきりきり

秘  
まはまは涼のりいりいり

松常と涼のりいりいりいり  
つねと君あはりいりいりいり  
けいをわらひありいりいりいり  
涼のりいりいりいりいりいり  
高三位中おあはりいりいりいり  
かきいりいりいりいりいりいり  
なりては髪をいりいりいりいり  
て髪をいりいりいりいりいり



と又かゝりて衣を指貫たし  
てりしてたてまつり行そかの  
かりて衣を入あけりてふん  
面白くふふりは長如何

まに身よそひぬるも

私乞又面白くもきり海のうね  
流れしけいそまけいそまけ  
時流ふけのよまかりのけしと  
おけしを別てし流たにまらま

あゝいそまけをよかきこめま  
とわきにそまけをまれしそま  
い海の流しぬひしそま実身  
にうらそひそまれぬそま  
ありあゝそまのそまそま  
まぬらそま乃そまにそま  
しくそま

そり流しそり井流しそり  
流しそりそりそりそり



秘  
そよじのまゝやゆのまゝゆに  
まんれをまあししゆーはてふし  
ひさあししゆーは髪めを捨ゆつ  
ゆそとありしゆーけてふんや  
義孝はまはれもころふていりゆか  
は門文を面白く又あのをそあし  
ゆつゆそふしゆーゆつゆそゆ  
ま捨ゆつゆそいあつにゆゆつ  
ゆーゆー面白くまゆーゆゆゆ  
ゆゆゆ

とそへ出入ゆゆーゆゆの飛ゆ  
ま本柱とゆゆゆ一腰借路ゆゆ  
又まゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆの深切ゆゆゆゆゆゆゆ  
まゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

・  
養國は殿の勲利の世はゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
齡のゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆ



世宗志願一々

<sup>秘</sup>

源公の父母を以て慕はれし事  
は

ま

是に於ては公の志願を以て慕はれし事  
は  
源公の父母を以て慕はれし事  
は

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事

<sup>秘</sup>

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事

<sup>は</sup>

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事

源公の父母を以て慕はれし事



程らるるあるれとらるるぬるぬる  
さうし

つまそとつらりある

つれてつらりあるひんかあかん

つらりあるせれ命とあは 伊勢

幾度か是の源氏勅とての左将

らに都る勅免れつらりともあつた

是のらと湯右の美おれの結句の

とてそ勅とあは

入道の言ふと

幾回冷のさうらとと海とあは

ゆつとあつたのおつあは

ゆつとあつたのおつあは

幾回冷あつたの密通の事と

あつたのらり

さうし

是のらとあつた入道文と源氏

のあつたあつた



とりつりぬのそめやましくもてし  
ゆつり事也

秋  
落をこれ西の中へ

義國海へ放つかの西へれりて  
かろわあそいあけまきこせぬり  
りゆり事也

かまけりあろきこせぬ

是と放つかの西へぬまきこ  
りゆりゆりまきこせぬ海へ

いあまらるぬこみゆりこせぬ人  
れこめゆりまきこせぬ  
て海へあまれこあまらるゆり  
おぬこみゆりまきこせぬ  
あまらるゆり

かろりにうぬ世の人

海氏あつたよ空通のゆり  
いひつるふいあまらる

義國世の人こせぬのこせぬ



右后れさつり菽量方此源のこゝれ  
と波の毛と吹て病と求む射をあれ  
あよとつとくおつがの堪出らふ  
所くおとむる故よ人の志うり也  
やみわつり此人の世おむじを

<sup>秘</sup>ららののこつとてふくまらしてちや  
にこのうらりそ敵の人の世おむじ  
けさーとつと人あふ海也  
<sup>身</sup>おつらふらむそやみわつり此の

あつらふらむしあやうにこの世  
そりそ敵の人の世おむじや  
つらふら人の世おむじとる海の  
所ひひとつり

私言詞御前後志うりやうあはれ  
あつらふらむしあはの世のあつが  
あく堪忠志路うらそつらつりに  
しつらふらむの人のあつらふらむ  
いあつらふらむのあつらふらむ



程の海はゆるしと井とらうのやまき  
りてくしつる世じとつと神れさそ  
あねうらちりしんらひくうり  
ゆをすとい友つやの女のみあそ志の  
て貞心なせられらる海志のひ  
あまらあつくれまといふくあ  
まのめくくしとせすつひおらん  
たこそやみわらつりれ海のほおしを  
いふにすれらるらあれとあつが

此のよがめあはすきりせりてく  
つるをばしといふまての海の心を  
又私云は神とれらあそいむつうく  
ゆうたれ共らりうね世らん  
あれといひうらんかうそやみわ  
りりれ人のほおしをいふはけそ  
ふてああらるりしらのひらた  
海をすうらやまきくしとくし  
つるをばしといふまての海志の



堪忍せし海とさひあまらぬ  
庭とれらのひくたはむかす  
しそ人のひ出る事あるも  
い身特れらのおしじりか  
おれれし美のお形もあ  
ほまれはじりか

<sup>秋</sup>草子地に  
おし海とあはれはおほ

ふらに海の橋を  
おりうなれはさすり  
しりす

所よりすうし海やあそ  
養也下にかくあつたのお母を  
け

けしあいら  
<sup>秋</sup>又の朝也

あけくさくはやく  
あけくさくはやく  
あけくさくはやく

七巻



とらあまのまはむいんはつひ

向板

枯もてれ命と志くればまはれ其の

森れつら枝とやくもくのみ

塩やくと役の字にとりあひてつゆ

あけさし志あふにふくみたり

塩とやるとつら身の後とてむら

んの君れはたふら

勝月也

在勝月夜

に〜あまのまはむいんはつひ

くつらあつらよゆ〜つらあつら

花打鏡

風は〜く〜けつらあつら

ち〜ら〜ゆれ〜さ〜あ〜

し、葉は探の方紙を〜して〜あつら

ま〜て勝れあひのせ〜あつら

浦人海、はとら

塩や〜あまや〜あ〜ん〜あつら

あれの〜あ〜あ〜煙〜あつら

あつら〜あ身れ〜あ〜あ〜あつら

紗

專



ついでにありはるはのこし

義國すはの浦のこひの煙とゆふの

ついでにありはるはのこし

いふおのこしと志のつやうにのこし

我の浦のつやうにのこし

いふおのこしと志のつやうにのこし

同去海人の海人は

世られつねの海人は

あはれく叶れと

私云海人の海人は

さうありはるはのこし

<sup>秘</sup> 是ゆて又の詞也

海の端若れあはれは

くしと又ちりやあはれ

ねこよあはれ

中細き君の中にあり

中細きの君は

又とよまはるはのこし



あつたまひくことなむ

深の事公勝のあつたまひくことなむ

中納言君れ又お福んはよりのひらく

あつたまひくことなむ

深乃らん

うらあつたまひ

深の勝のこゝろひらく

姫君の御文

<sup>兼少</sup>あつたまひくことなむ

又あつたまひくことなむ

事あつたまひくことなむ

二条君(文)の御文

<sup>秘</sup>あつたまひくことなむ

あつたまひくことなむ

あつたまひくことなむ

<sup>兼</sup>あつたまひくことなむ

あつたまひくことなむ

<sup>兼</sup>あつたまひくことなむ



をくくくくくくくくくくくく

秘

はよよひひりねのふも又高きとのめ  
物ましくくくくくくくくくくくく  
養中極くし神りり 波踏くくく  
衣のねれれれれれれれれれれれ

物の多しゆつらさめ

秘

二条院よりとる(源氏君此衣裳と  
とらりゆつらさめ物めららとらりゆ  
くくくくくくくくくくくくくく

秘

同衣物の多しゆつらさめ  
とらりゆつらさめ

松よりりりりりりりりりりりり  
袖よりりりりりりりりりりりり  
ははははははははははははははは

何りりりりりりりりりりりり

秘

あつらひゆつらさめ物めららとらり  
ゆつらさめ

しんりりりりりりりりりりりり



あつたきものいふ

志めやうあて

義國はつらりよそ海の御下り  
半すてあつたきものいふ

れ志のひそや

あつたきものいふ  
又うらへ

あつたきものいふ  
とうらへ

とうらへ

あつたきものいふ

聖廟宰府に西下向之後長の西精進  
よそ朝夕は経を持讀せしあり  
とて叙意ノ十言中にて徹く抛愛樂  
漸々謝筆腫たあり又重湯の作  
作にも菊の為誰涙長身終不破  
聖廟も西精進よそあり  
大般れり君の西のあり



義同夕音此所めのかく宰相君より  
西をよりにりて又ちあつても又も  
夕音にりてちあつてもあつても  
るやとくおひひりて

をのつゝあひみせん

は井にのあひのみりて

たのももさくふ

祖父母まゝあつてもちりて

あのみらひもさくふ

秘 屯

子のなをあれからとけりて君れり  
人れあやのらにわいあつても

子成思よみからよもつていむらり

とつていむらり夕音れりちりて

とれりちりて夕音にたのり

んくもあつてもちりて

夫婦の中一故ち切らり

事

義史の秘ノ義ノ同



あつちのよきなり

まことやちのしし福のまことれ

よよししてなり

<sup>秘</sup> 弟の地也

同まじ細のり多事とくくひ

うくしつらう調れ又作坊よりれ

西をくつきの事とつひの事れとく

私り各事れ事ありの由もやれ調者

つひの事れまことれなりあらん

まじつははの事れよよし

まじつらりあり西も

いり調れくくひの事れ

ひつとつと調ありつとつと

つとつとつとつとつと

の事れつとつと

かのつとつとつとつとつと

<sup>秘</sup> 此条は身あり

つとつと



秘 且々々々々々々々々々

美同海ありし古希は是可人なり  
作務ありしす海はつらひありし也

いさなり

美由文章何れたかひらへん

十くれていさな海つらひ

海島ちとほやう

るはうら

海島前此文の初也 昇

あけぬ秋の心まゝ

夏乃やうたうらひ

さりし年月

やうて立地りたしうらひ

はらうらひのこゝ

女言ふてハ佛經をたどてあれぬ

事と罷少くはつら

さゆく乃さひる月七 祓事ハ佛經

うらひちてさうらひ説ありし不問











又六条御集

私是道中書下此文の詞よてまは  
伊勢海丸をかくれりありとらりし

いせ海丸をかくれりありとらりし

梨 御身之たりとらりしに源氏に定て海

渚に居たりとらりしとらりしあり

落匂つひつめたりとらりし源氏に  
ありとらりしとらりしとらりし

もろこしとらりし

やまありとらりし求合へ貝もたれ  
とらりしとらりし

よのほありとらりし

秘 くらとらりしとらりしとらりし

中書下此文の詞よてまは

伊勢海丸をかくれりありとらりし

とらりしとらりしとらりし

とらりしとらりしとらりし

とらりしとらりしとらりし







新宮より又ハ作樂園をの事は

わらふ事あり

<sup>新</sup>西皇太后の使

同去りし事ありしは

る人おておしりしは

志しりし事あり

かゝる事ありしは

西皇太后の使

はの人の事あり

源の事あり

西皇太后の使

しる事あり

同去りし事あり

く母の事あり

<sup>新</sup>源の事あり

ねてしる事あり

して作樂園をの事あり

はの事あり



つれくらくわさるゝ

義國之是く又の物ふはは浦の  
物とくわさるゝ

あんとくわさるゝ又の物ありとあり

私に長りううふ書つむくとん

はくわさるゝあひくは伊勢人

物とくわさるゝくわさるゝ物とくわ

さるゝ是くわさるゝ又の物ありと

くわさるゝ

尾原

いせ人れはのくくく小船あり

くわさるゝあひくは伊勢人

風俗 伊勢人

いせ人のあひくは物とくわさるゝ

くわさるゝあひくは物とくわさるゝ

いせ人のあひくは物とくわさるゝ

くわさるゝ

或抄に記すのまゝ物とくわさるゝ

くわさるゝ







物語にうたあつりつらしくいふく  
と細くはたたりいあるは

新妻里也

是も新妻文もつらさき  
もも文あつり

かあつとあつりつらさき

新妻里也あつりつらさき  
まやふくれつら文のさあ

めなれぬらつり

義岡もつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき

新妻岡新妻里也あつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき  
つらさきあつりつらさき

新妻里也

あつりつらさきあつりつらさき



まげくもあがりくち袖水

松

いさかの折又花菱里れらふく  
うらひさそ古の折とつらあなれ  
下向く海とらふんをらりち  
此人の海の霧橋の空もひはら  
るあふくささ結くさく  
のあくかた

界

いさ折又花菱里れらふく  
のらあさあくあつ

じさして古の折くち申し又あなれく

義岡中別よあさく

いつくあてまらくくさるあな物  
らと又あさく

松云は是古のらくくさるあな物又

又い花菱里れらふく

あなく人乃性くさく

まにまに

松

いさ折と海のおな



養國親友里れこのむいふ  
とおひやうた

やんじくもて門をりて人のあは  
らへ同去同

私心養、なふくへくは

あふふはつらとさうく

これと親友里れ修程ふれり  
ちうはくふくは

これの都ちうさ國おりへ

ちうはくふくは

親友里れ修程ふれり  
京の家司、作のりせうく

かんれ君、人さうく

勝月和、些はさうめさせはる  
身白

養國海のすもへうらひのりも勝

月和ゆへなれい

尚侍退出事

或託曰九条殿六君尚侍緋子永延え







つき此人て尚侍中一の女官とてその  
職ありしをわれのあしと寵とかり  
わらとあつては四女やけさぬあ  
言つるつりよとあをし給也

又みあくらりしゆをそ

<sup>秘</sup>源ゆみあそと也

は後書代の改れをりうーとさ  
ゆはとあつりーとり

れんよ志人あーとつそ

<sup>秘</sup>源れとゆ勝はつとれぬとあし

義同尚侍のゆをなれてあつては源  
のよゆあつてあつてとつては勝月  
和内へあつてあつてはよ源へをな  
ゆひ一事をあつてこのれとつて  
あつてあつての事とあり

のみーりしゆのゆあ

勝は別して朱藤れゆ寵をありし人  
われとるゆれ若くして又あつて



されらる町からかきくはるやうにはもろく  
さしとみれと又とみゆのしくは寵あ  
ふれうも人のきくまはくは口よ  
勝のしくはくらくにひり又もくは  
はしくは露むのあつゆきま  
かきくはとむとみゆのえり  
あつゆきま  
うふつとみゆ

みよのは前さくは勝はさくはひゆ

うはつふとみ

源のりやとちり

はるふとみ

朱萐れはるふとみを勝のさくは

おしひつとみ

<sup>秘</sup>源の心事を勝月夜に忘れぬとみ

養岡朱萐れはるふの源よりかきくは

勝のち中にかきくは眞かきくは

はあさひのほつとみ



義同清極

その人れなきことさうりく  
多れ

<sup>母</sup>勅定

義同源のこら紙朱菴のあり

おそこの紙也

さおし人おほらん

義同勝のら中紙察しての紙は

福さみらん 字去同

又勅別のこら紙もあらん

ひらりおほらん

何れも興れおほらん

流のありの紙也

<sup>専</sup>前の事流の紙遺云あり事

<sup>秘</sup>先皇れ紙もさうり

何れ

罪と得うし

先皇れ流遺訓とさうり

業さうりんとさうり



あんなくませぬふ

朱菫の西さふ

え縁んしねんし

<sup>秘</sup> 勝月転く 同去同

義岡勝のこたへくは折るふ

世中くそあふはまて

みくしの湯初く

義史人々の四初四年此初まに

くはれまにしはなれあり

史史世中へのはくまふあり

久くせよあらんよ

義事何んよまにあらはれ

史命とあつらまにしはなれ

いふおはれ

<sup>秘</sup> 勝は射くくあらあ

ちうは海まのつれよ

<sup>秘</sup> 源のつれよあつらまに 義史同

私源の生別がよふと朱菫は



勝れよひはくし

のけつせよ

河拾

志志あんなはのせんいまの世の

いあしそ人の命くりたれ

界

いあ志志あんなはのせんいあ

ぬしのあつり朱薙れあつり月夜は

のせしそと契つたれあつり

秘

志志あんなはのせんいあ

也

いああんなは中此いああんなの詞よ

いああんなはの我あつりあつり

いああんなはのあつり

私云いああんなのあつり

いああんなの

秘

いああんなはのあつり

いああんなはのあつり

いああんなはの中いあ

いとあつり

あつり



秘

内侍のうみく

勝の海く

朱葦流のあられくそく入る  
さゆそくたにこのあられく  
さるちんさあろく

さりやうつれよ

秘

かゝの西親くわつ西くあろく

秘 義同

義同朱葦ノ命あろくまうささあ  
ゆろくにつまその海くちんたかろ

われとあし源少への海く作ろく  
く源少へのあろくと西親くそくち  
てゆろく

みこさうそく

秘

朱葦流のあろく

義同勝く西子のあろく

秘

是く勅定く山州く今上く西証生る  
く勝の西版く西子くあろく

東宮く院のあろく



松  
東宮冷と兼董浣の西行子よこせ給  
て位とゆつりぬと相奪帝の所  
遺をありしる

あゝあゝ

松  
は去宮冷と凍て八宮とよそり  
と弘徽厘の遠き宮治より  
てみこり

松  
私之勅漢高祖に八男ありを中  
淮南房王といふ后れ母とて養

松  
恒は謀反の心ありし人といは八宮を  
に准すといは松 己上秘

松  
畿内八宮事といはあの親伴坊所是  
た文よりゆつりよふり入るる世の  
ありさむといはあよあゆみと  
そとあゆみと

松  
松抄抄とていふきのすといは  
たつたきのつと注し  
んくろ







及門方

是よりいふにすまは浦の

あはれむのやうに

海はすくもみちをた

前へ海つらやふそあはれよら

こけあつ山中とありまを梅すこ

し遠しとつら 養父同

新平北中細きのせはあつたあつと

つひえんう波

河 奥入之新平中細き方と為能宮朝

方お世と

作の 樹人北被涼くわりのゆ

開明のゆす海のう風 能宮

案くあ人軟有数續古今集卷十

漢國を海より可し侍まはれ時人

侍たり 中納言新平

橋人のたれと涼くわりのゆ

せは吹こゆすり北う風



花

天曆正屏風文

忠見

秋風の閑少きこゆるさへも

秋の閑少きこゆるさへも

續古今集 秋の閑少きこゆるさへも

時ふ人侍たり 中納言新平

旅人のさうとさうとくぬさう

閑明こゆるさへも

今案閑明こゆるさへも

新平方々にありさうとくぬさう

新平よ徳意のさうとくぬさう

心物法の初れ閑明こゆるさへも

浪とつる思見のさうとくぬさう

つる旅人れたも涼しくともあり新平の

文あるにありて思見のさうとくぬさう

ひまうて新平方々にありさうとくぬさう

とくぬさう侍たりさうとくぬさう

奉朝の書にありさうとくぬさう

記者の飛騨よありさうとくぬさう

今案閑明こゆるさへも  
新平方々にありさうとくぬさう  
旅人のさうとさうとくぬさう  
閑明こゆるさへも  
今案閑明こゆるさへも  
新平方々にありさうとくぬさう  
新平よ徳意のさうとくぬさう  
心物法の初れ閑明こゆるさへも  
浪とつる思見のさうとくぬさう  
つる旅人れたも涼しくともあり新平の  
文あるにありて思見のさうとくぬさう  
ひまうて新平方々にありさうとくぬさう  
とくぬさう侍たりさうとくぬさう  
奉朝の書にありさうとくぬさう  
記者の飛騨よありさうとくぬさう



行はくしにすゆく  
界  
花鳥よくく

花鳥に志見の好風の寄歌あり  
こたけうらさるすまのうら波節  
しとくは浦波といふよりのりてこ  
れをなすて行年とあるといあやゆ  
ちとくさるうれゆわい

今葉行年の志見より先葉結ん  
は行年此方より志見の寄し出せり

とくさるは行の心は彼行年此中細  
の用吹は行の心は彼行年此中細  
行とよめすらんよんは結風おと  
かきそあはにそ浦波とけの結風と  
くひまをくはる

義同 秘む者 同行年此方よりを  
用

独り紙とゆ

義同 海の心



枕とてさくらさくら

遺愛寺鐘

枕能

白木天

義同遺愛寺の持家（いさ）のこゝろあはれ  
し語勢おしし

枕のくさりな

枕のこころふくまはるたまふ（い）  
りの枕もさぬつるり（新恒）

海川水（お）すれくやあな（い）ぬれ

枕のうらみとまじりて

秘昇（い）りあはは

義同（い）く

あはは

同去（い）石の枕しし

琴とすうし

義同源（い）法（い）藝（い）のうら別（い）て琴

此と

源（い）ゝ（い）ち（い）く（い）な（い）ま（い）う（い）み（い）

あはは（い）り（い）風（い）や（い）らん

義同（い）り（い）あ（い）は（い）は（い）吹（い）風（い）あ（い）は（い）



おんるりせしつらかしくねりゆふ  
はとせ

<sup>秘</sup> 京極中納言北 新夏新 神一かけ

さそかふむねのせむせし思ふささり  
うよう風とよみかひひし山家  
おしりりおしせし

<sup>河</sup> 浪さほおまれ玉藻とよりあま  
おあささり風とさうるじ 新極

私に寄紙川よ及ハサレれ

人々おあささ

琴のよささし 寄紙海 新極  
新よあつるる人々のあつるさ  
さつあり

めそささあ海さうにまのたれて

源の詠言れ新よ人々感ふ今  
てあさのりし

あささあさのりし

あらさあさのりし 新極







さくく此繪も

秘

は繪のらよ繪合の巻にせり

義國繪合巻の席合

屏風のありてとある

屏風の表裏も既ありとて繪るは也

は繪れとて表は裏よりみれば

にも

或は之より多西言も既之より多

はとて面より西言既には繪る面

の或は之の母をの箱の屏風れ

ひも西家各別へ向は也活

西言の既とてするにりて繪る面

とすりてありてを撰る

私屏風の面此事法極に也

は義志のりて也活すりり及

りりれ也

んくはとてありて

若世紫巻にあるり山寺



いよやうくあゝの浦のいんいん  
ちりし回巻よ人のあまにけり  
海山れあつたまをいんいん  
てはいつたにけりいんいん  
せぬいんとあつた巻の次り  
後のいんいんけりいんいん  
お魚いんいんいん

私言衣巻いんいんや山寺よ人  
此のいんいんいんいんいん

糸

山下山寺よそのいんいん

若葉巻よいつたにけりいんいん  
いんいんいんいんいん

義国よいんいんいんいん  
此のいんいんいんいん

今よいんいんいんいん  
若葉よいつたにけりいんいん  
いんいんいんいんいん  
いんいんいんいんいん



はしりれとよふとめり子枝つねのり

子枝常則 互高名録共心畫工

應和四年四月九日西記云とた史志苑

鳥常則圖書西廂南壁白澤王

像

常則名字天曆西記中名在之

千枝常則皆絵師之

養國山河の絵師之 系高名録

日本のみやこれ名人ともいひてある

めくら高名録とあり

はしりれとよふとめり子枝つねのり

化絵

新編樂記

はしりれとよふとめり子枝つねのり

はしりれとよふとめり子枝つねのり

はしりれとよふとめり子枝つねのり

線文の畫師の口傳あり

源氏の墨の跡と絵師ふたつとせり

とて説き及ぶ共々ありとて絵師と

とていへりやとていへり















心未注

あまやうたう

秘 文此濃

あまやうたう

釋迦牟尼佛弟子 某 歸命頂礼白佛

言史菩提道樹之月影洒沙羅之

然會后連禪河之水咽跋提之波浪

并胡文粹類文

あまやうたうのほろたうのてん管経

野曲の柏子あまは後色大列と付く

秘 金剛佛子某を〜〜〜 兼同

義史やうて中精進よてとあり又一

切底生悉是吾子とは花経二巻摩訶

喩品にもあり佛弟子の四門此弟子が

れハ信もその内之四門の内ノ優婆塞之

教書の遺法とけつとてあまやうた

釈迦牟尼佛弟子とあり

あまやうたう



養國是の經し三十一

おはらり舟よものうらみのちりて

船中ゆてのうらひと棹をりしり

詩にも輕舟短棹唱を去るあり

ちりてさるるれうらと

<sup>秘</sup>舟とつり

<sup>舟</sup>鴈陣易迷秋嶺上鳥舟輕舟夕

陽中は詩のうらとあり

鳥舟

日中紀曰後生神名鳥と石楠船神示

名謂天鳥船神次生鳥磐椽棹船神

彦火火出見言也

おきりしりもつりまにわらり

いしん忘れしものごとくに

おきり鳥と鷗の名と舟と鷗と似

たそおきりしりもはくしり詩と

も舟と舟とわらりもつり夜と

船つく鷗とつり











いふもあはくおのの今そまのこ  
りり力もたふあはるるあはるる  
あはるる

行末いふあはるるあは

あはるるあはるるの父母いふあはるる  
あはるるあはるる

人かあはるる

人あはるる

あはるるあはるるあはるる

母

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるる

あはるるあはるる

母

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるる



<sup>抄</sup> 源乃々中し

やんこる記この

<sup>抄</sup> 紫上し

私源のはまらぬさうりあへつやと  
ゆつりあうりのよさ大さ  
ぬくふくおのふく紫乃々  
くろく結すふもさうり  
さうりあうり源とゆめ  
ゆめさうりあうり

志派さゆくし記あつあて

<sup>抄</sup> 紫とくんさゆんさうり

たうりは結くんさゆんさうり  
上の色事りとあゆみ  
是ハ色事りとあゆみ  
合りあうりあていさゆ

<sup>抄</sup> 志上あうりの方へのあせえんせ

あうりあていさゆ  
とあり絵合乃々あせえんせ



あつてす

一劫を仕事いじつて此の君はた  
うとせそつり又義たつ  
よふゆゑ一縁を成りまあれ  
から事をも成らん人方あつて  
るふりあつてあつてあつて  
とむじつて此の上あつて  
あつて

いそつそつりあつてあつて

秘日記のやうよ

いそつそつりあつてあつて

よまれば

秘日記のやうよ

いつたつてあつてあつて

秘 此り末の事ともあつて

菓子地

秘 け板あつてあつてあつて

とあつてあつてあつて







右大臣の心むしとめ

秘

頼忠右大臣の父と義孝左大臣の母の  
の巻くられりうとせ

おとこみこむしとれ

秘

後り今よとやせはとー二歳と  
東交りしとせ

秘

冷泉院秘

ゆりされまのきとせ

源のゆりしのとせ

あまのうらと宿と御物とせ

中人より右大臣のしとせ

かゝるゝとせ

あまのうらと右大臣のしとせ

とせりてとせ

ゆりしのとせ

これらり世らくとせ

果しとせとせ

かゝるゝとせ



ぬえ

いりー素直つー

らあーありーます西目ついでにのあ

又は比をのくさせまやとほ

けてるるー

せろのまやあるりのあ

師ほあるま志まーあ

つりー素直つー

ー志りーよ朱菴の常月を

らりーるりーつ比又ま

クヤまえ

七月ツキハツアユリ亦余日乃か

源乃政乃の事

又

中人秘りゆつれ給

とらりあてこ紙か

り

此の事



秘  
此井よりとるひし

或抄あきしり源のふし

ふつねたき

源のふ中あも此のふゆ系とん

とおひりあし海を常たる

らひいつとおひつた

あつたれい

くかりくろをまひよしおひ

たけさつるの俄り帰系乃定

あつたつあてい又ひしの名あさ

あつたつあてい又ひしの名あさ

ふ中と

入る所たき

くろの中うけられたもひし

ちつらんとおひひかあもくちり

さきとゆ系しゆてし後の

栄花もあつた入たあひ

あつた



花の枝ハ折られかゝ

ぬ糸ちり紙ゆへみ紙おひくね海

こゝろ

六月ヒナツキツらりふもふくくる一頁

あゝのど懐妊のゆ秘曰并前

ぬ糸れゆ活ありり先のきふかた

る私

あやあゝかかゝや

ぬ糸ちりきゆへりりるまふんるり

る

あや秘物およつ頁

一生涯物そののきくくさきこととを

あやあゝかかゝ事なるれも宿

周ありとおひす

女ハさうあもいりま

は比陽ふさともり紙やちるを

うきくくあよ又西海海のちり

たれハ一紙おひいさう紙也







月よりわらわとつて七月亦余の如き  
福を宣方の後より志きりしり  
如くしきや八月より帰系と  
みきりたり志きりしり  
乃取八月十日取

かきやんた

<sup>秘</sup> 源乃ん

さまくわいおわいんたれん

源の明存よみ秘あふん

おわいんたれん  
とくちんたれん  
のらりんたれん

んしきりん

<sup>秘</sup> 惟光おん

月比の露人

<sup>秘</sup> あいの上れ事と志のの

り

ははあやうい



是ハハク一書分クこの際ナリト  
リナリ月此ハナクハ清ムクアリ  
ヤリナクハナクハナクハナクハ  
ナクハナクハナクハナクハナクハ  
人ナリハナクハナクハナクハナクハ  
ナクハナクハナクハナクハナクハ

少細云志久トシテ

良信之善業トアリ事ノ  
少細云ハ良信ノ事ノ源少細云ト云

卷ノナクハナクハナクハナクハ

小山ナクハナクハナクハナクハ  
ヨハナクハナクハナクハナクハ

ナクハナクハナクハナクハ

良信ノ事ノ源少細云ト云  
ナクハナクハナクハナクハ

ナクハナクハナクハナクハ

ナクハナクハナクハナクハ

源氏君明後日均集アリト云ト云







あしれ上のちる後より昔ておの  
社の及らあそとらひたけし

紅 ちりよつをそりこりせ

浪乃 志秋乃風り

波のしと始風よ一が女く

さいいゆか

志不やく多あり

秘 浦とちりれまつくさ折良乃秋

のあき連よつをそりかたりり

はくしれ巻りといはきつりのち

とろり津日

は後感懐おころんくはあひさ

るさま下乃神をくくおろく

しあられあさし

赤 ああさひのきらちわらとものか焼煙

お新しきあひさ

秘 法井りりのちりし

くま



私事へむうんごちきりり給ふ事  
のお形しきりし

おのれ

おれつめておはれこころものたのしみと

秘

今いひおれこころしきり

秘

あつめておはれあひかてし思ひ

央よりあまをり

秘

おれあひかて

私今をいひおれこころあまはる  
る月のかよのこころあまをり

あつこころし

あつれようらあつて

秘

あつとらあつこころあまをり 秘

あつこころし

あつとらあつこころあまをり

秘

あつこころし

あつとらあつこころあまをり

あつこころし

あつとらあつこころあまをり



<sup>秘</sup> 奉と琴うりりせり 琴曰

京よりそせありまきりるらる琴

源が京の対りせまきりるらる

のちそりあり

入たのえあふで

<sup>秘</sup> ありのよはすむあ

入た源乃の琴の言にむりされ

て堪忠ぢす筆のよはすむあ

内へうり入てありりのよはすむ

よりま

うりもやうはえ

ありのよは源乃の琴の言にむりされ

うけて志のひやうりのよはすむあ

るり一はの筆のよはすむあ

入た宮の湯にれき

<sup>秘</sup> 源乃の女院筆のよはすむあ

私ういはの又りれは源乃の

筆の當時無双といふ也源のよ



あーのさるさるまじ

あれらり落き此筆乃紙  
子元源のち中よあがまじま  
たり

これらあくまて

あーれうのさる福よん  
福よんねん

<sup>秘</sup>一さあは

<sup>弄</sup>福よんはんまりいんす  
うさあるまや

あの所よりさ

<sup>秘</sup>源北御耳りさあつ  
さひんた

んやまー素

あくゆーくあつあつあつ  
あつあつあつあつあつ  
あつあつ



くわし

源のら中へ

らりりりゆくさきれ

師ふれとくふりらりま

かり

琴きんハ中さうにあり平ら申せのさみよ

よのまよ

明

あに形見よらめをさき始り大

か減りまたのめをくわらへ

はさきぬ袖たやまを志のらん

一ハ琴たはさきりさそつさせぬ

袖はらりりハ又たぬの

くさりりり

一ハ琴弄はらりりそらり

一ハ琴秘はらりりさきりかりり

又ハはありすは申せ乃らみ中

ある減りれはらりりりり

と大







明石とれの中へ  
半くら多ふあつては

夜海の見し

ひともまよひて

人のすまじ人回し

<sup>原</sup>うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

也明石上

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

花

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

井

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな

うらとそくふしあまきうの  
あうりつあとおひつらうな



紗

花鳥うゝ見をうらみはよみありて  
うらみは紙浪よりありてはよ  
なみのそこのわりてはよき  
うらみはうらみはよき

私は紗よむは紙よ

うらみはうらみはよき

界

あゝ此よの身とてうらみは  
うらみは紙浪より切たりの紙  
志はひあふありて

志はひあふとやありて

源はひは紙浪より紙よ  
かゝるは

志はひあふ

花

源氏の女はよき紙浪より  
うらみは紙浪よりありてはよ  
浦とてはよき紙浪よりありて  
うらみは紙浪よりありてはよ  
とあふりてはよき紙浪より



秘

明石上もかきりと折し給ふ  
志しきりくかきりそめた  
とあれしりの名跡と折し  
まきしとあき

し素よるはとらうあす

秘

あしの上はあきりくあし  
まきしと良書をい思ふ

し素よる

秘

系子地

秘

いひあつ事も何よはけ  
かきり又このたし事  
あきりあきり何れを  
とけ素りしとらうとらう  
系子地

入るきよれ御まきけ

西攻系乃日の事

きよびのゆき

法奉乃人々ちとせんのかき



と入るのまじきふた

御まじひ

源乃正女衣束

御まじひのあまうこつけ

御衣櫃 あまうこ荷

かりの正女衣束

御衣 經裳 日笠

かとうまじひとや人のいそりん

かとうまじひとや人のいそりん

志がとまじひの志がたれふた

同志がたれかたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた

志がとまじひの志がたれふた







をよいまひん

いぬいまはこをうらふ事そんぞ

入たしとせんとあれ

道せの身かきととせ

私出家入たれ身あまははとくりよ

とたのぬ

かひとほくらも

同作接ぶて目ハタカニナヤラストアリ

<sup>入</sup>せうみよこら志願しむがとちりて

たこのさうとえさういふおれ

<sup>秘</sup>いぬあはせとていふいぬあはせ

そらとせい岸とらうきせの岸又か

の岸とら喜抱とつりし射す

<sup>秘</sup>は器ハとせとつりしあはえき

らさる

私志願しむる年ハ

このやういふ事ハ

人乃あわのさうらにやいふ



子成りしなりはるひわらふ  
るらのゆきよしちゆう方の  
ありあり

昇  
心のおもひは成りしゆきのあり  
うらやまはちかしくされしを  
てしよめれ事とねりし  
まや

私さうらのやにまよひしを  
るのゆきうらやまはちかしくされし

い國さしひかてぬし  
とまへ

とらへし事とねりし

私  
しよめれ事とねりし

わらわしあはれし事とねりし  
私  
私さうらのやにまよひしを  
るのゆきうらやまはちかしくされし  
もひし事とねりし  
もひし事とねりし



源のまゝ

とあらうくうらあう

たうんとそふまうらうゆれあう

う

海くまうらうゆれ

あうらうらうらう

源の初も懐妊の事

いあうらうらうらう

やうらうらうらう

きうらうらう

あうらうらうらう

いあうらうらう

あうらうらう

あうらうらう

いあうらうらう

あうらうらう

あうらうらう

源のまゝ



いゝ物あやうき

源の清さ中紙かんて入るれい

あろまてりすさゆ也

ろがよ

ろうとこれら

あーのうこ

身のうきよりあて

あーのよの身の程れきあて  
根本の根こ

もうた紙事かれとうらまて  
まへ

源の品と改集りあーと  
ゆん事ハるまの義事るり  
は連ハりりた紙ゆとまは連  
もうれぢり事れくま義事  
しらまてまてとまひり



それより西のけのちひて懸く  
とくくううせんちるたふおら  
かろく

きりげ貴事

せんこそれたれまにたくの  
とらり

母君もたぐさあしひて

母君は後梅

ひがく—素人 抄 入道

母君は梅して入道たうらよま  
ひのく細合ぬ事ゆへちびあつて  
とら

あかりまや

抄 入道の初をりおめ—まじりま

とは懐妊の事

あれゆ—やとそ

母君は後梅—明る上の梅の  
くれより入道ありてあてちび



かりおのりしきりまきりまきりまきりまきり  
おのりしきりまきりまきりまきりまきり  
しきりまきりまきりまきりまきり

めれと母君かきし

入るれまきりまきりまきりまきり  
とあひまきりまきりまきりまきり  
とれ乳母と母君とま

かきりまきりまきりまきり

母君めれとあひまきりまきりまきり

見て割まきりまきりまきりまきり  
くまきりまきりまきりまきり

めれと母君かきし

おのりまきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきりまきり  
まきり

ひのひのひのひ

晝の一日の事

いとろまきりまきりまきりまきり  
くまきりまきりまきりまきりまきり  
くまきりまきりまきりまきりまきり



わら事りりりするこころいり  
の入るのありさま也

もむらゆくも

教珠をりおとたひもねる  
さまと面ゆくれたせり

ふと志もりて

是も入るのしぬれ忘却  
る神也

でしもにあいりて

何 淡 ニクム 悪也 一 私 ヲコナヒ 約も懈怠一

ろ川と却一しと弟子も  
教割す也

月報りりそくまやうたりし物ハ

齊 入る事也

秘 入道此事之物乃字ふんや一  
キヤウタマウ 約石す也

りあつ思れこそふ

解りあつあつありわらそひ



若く

やまの多るやまのたかんまらう物  
まのされり

入るの事なりはるじのまうて  
とつ子なり源の山ゆ京北は  
改路のあまき入る母未明の上  
まられあひかりを責をらさまら  
をせりまらたりをまらなりなる  
とつ子に改路ありて後の事と

ゆるくまき

君のたふははる

是より源乃事なり

私あまらり源乃改京北新と又  
つり源波あて見そ新とま之  
源波乃後ハ上古より源乃後乃  
在るなり仁徳神代以前なり此  
後の在ることなり

まらう



多うしたゆゆ京あううーくさ  
もまの巻りくく此立紙あ  
しとやうしてさうさうさう  
西使してゆゆ京あううーく  
さうしてゆ京あううーく  
さう

くわうゆせうえう

道遠

まみーーへる系福あまれ

て道遠りーるあう

いうきりりあひあ

源乃入海世

るこのんを

源乃あまあまれ人さう

女君をいひたあまのりあひあ

ゆの命

同ゆあま乃時命ようそめれ

希のあうーゆひーまうあ



いさうはくも

黒上は福ひさのむねのさき

まあへつれさし

<sup>秘</sup>まあへつれさし

水心あらぬ

源の水心あらぬ

又みあすり

あしあすりのさき

かやう

松うむすに

<sup>秘</sup>となくすり

くさ

花の人仕事

<sup>秘</sup>明石上のさき

きりあし

源方あし

きりあし

上はきりあし



とまゝのついで

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ

いふことゝいふことゝ



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

<sup>秘</sup>世中の事少くもせじし給れ  
よりしむは種をさうらよてまわら  
つことおふりしは~~~~~  
世中りるりとは

か~~~~~  
<sup>記</sup>

配流乃大石遷し後六載のちら  
<sup>シラシ</sup>出身の弁位り叙すとも官物の

位より~~~~~は叙すはは但三位  
以上とは養女として別勅とく  
まは時り志さるひて定すすこ  
終りよりして源氏の君を~~~~  
出方の位りの威治りては種  
官位より~~~~はら  
位ハ番祿乃大物をれはす~~~~  
その官位り~~~~  
権大納言はあり給ふ



花鳥よんてくさり本表は流罪の  
人はくさりて叙爵よりすんき  
とま進いはさせり罪ありくさり  
しりてくさりの衆縁乃大納言か  
里給也

かこくしりや此指大納言よ如給

職シキイシワマシ負令云大納言二人令い令此又  
乃くさりくさり二人の介い予くさり  
介われの指字とくさり之責也寛

平遺職云大納言勿過ス權正三人  
送職乃令予くさり人よ乃くさり予の  
介かれくさりくさり官の如く  
いづつ進も指字派くさりくさり  
源氏も權大納言といわれくさり  
中出よりい大納言い正一人權十  
人よりたまり

昇

花正此介の指り如くくさり  
よ古ハ大納言のくさり二人寛年き



識之正權三人之數多しなり中  
比より正一人権十人又之

<sup>秘</sup>大納言首三人之源氏と別任し  
あり之數多しなり之志ありなり  
梅子卿補任寛平九年大納言正  
之位藤原時平一人之六月十九日聖  
高并源光<sup>光</sup>は二人同日に権大納言  
に任せり権大納言は時始之是也  
摸し之

河

大納言正貞令之四人相當後三位  
寛平内正二人之後權官加増高  
倉御宇初為十人

天武天皇之年改御史大史于時  
三人為大納言

淳和天皇天長五年二月八日夏野  
始任權大納言 永觀元年八月始

置四人  
長和二年六月置五人 藤原頼通



加任

又慶應二年四月十七日勅日依官負  
令大納言四人職掌既比大臣官位中  
納言三人以補大納言不足同日勅日  
大納言二員為定更置中納言三人  
以補大納言不足例至于中納言者  
令外也云卿正負若太政大臣左右大  
臣各一人大納言二人中納言三人番納  
言八人合十六人寛平遺議詞也

云卿為正負代時よりよりて加増  
す夕也且大納言増減事凡端例  
光源氏權大納言より加任されり  
也而每人よりより外比大納言  
少ゆより念の事これより  
外の大納言ともども一權大納言  
と明くしと權大納言乃負較し  
猶加任されり也



此のよりの人も

と月れくく信有れんて

秘中人より此のまろくしんく

かれさるる本此喜よあへ

何昔云勅勞王家惟予幼人弗及知

今天勅威以歎固云之德教雷凡威以明周云之聖徳

朕小子其迎我國家礼亦宜王出郊

天止雨反風本則晝起二云命郡人

凡本取僵冬起而築歲則人熟尚書

寒々灰更煖拈樹復巢續日本紀

りありてくらし

源氏勅喚り應りて系内之

福ひまきさりて

源乃内り

さる物じつく

秘わかろ乃神をり

きくく



共いしくむきりかろく  
所と記しりまぬ人くか  
る

ふもろく

自止朱薙の海に對せんとおも  
ゆくおわらう

いそあり

天子れそまよと出御シエフギヨ

所らまいあて

イテオスハレニス

朱薙のい比中して所目あま  
ハま

十舟月

八月十舟月

志が

朱薙院乃御さ

物心

御不豫乃事よつきてま  
位とゆつんとあわ



わうろもとたれゆへは源氏君  
ハヤ一入られ多ふてされハ位か  
さらん事とちくおひしきゆ  
かさくゆんわそりり

あそひかともせむ

<sup>秘</sup>面白と勅定かり十女おれは

一の奥あり也

<sup>昇</sup>自上乃源氏より作るまき西網い  
りやま之責とま乃西網面白

<sup>源</sup>わさつうこに行る今うかれひのれこの

あうろり一年ハよきり

<sup>昇</sup>或本よ志るひうかれうかれ

とんか何こうわんさう也

<sup>花</sup>一本よ一ひうかれとありき

へうかれと物おひか何ひん

蛭子れ是うぬ事ハ三年よた

事やり日記りハむことあり

の毎よの集てたるあつるゆれを







日心天

蛭子事根國鹿國人たききわむ  
と深氏わつた邊りりさひよきんて

いられさる也

日心紀事

かきりあひつりあわれとかまらん

こせりあわれさうきりて

朝徳

河海

河

百葉十云志うよとくまへうぬ

古 日十七うらあひさ志か

へうわれーのひけ 古今集

あも好くまきようぬれとれあり

あらかたのうらら也

延喜上草履

文くーらめくうあひさか時ーあ

まけまわれーまかふうこのさすか

花

大神文生替の事を古抄とよ



ひきかれとて後亦一とてしてせざる  
くさきゆれいあまりににふしき  
くさくさやあまふさくさくさあふ  
やういふと集録要なりとてい  
日本紀より倭禁詔倭禁冊を天  
の西極とありて一面よあひまを  
あまのそれ事とあま極りありあふ  
くはしゆりあまや蛭子のあ  
しとてあまのそれ事とあま極りありあふ

杉印ゆり ハヤヒトノ 八尋友とててててててて  
恒よりあまのそれ事とあま極りありあふ  
事お遠ありあまのそれ事とあま極りありあふ

秘  
あまのそれ事とあま極りありあふ  
生るる限の兄とててててててて

何  
はみ久字ありありあまのそれ事とあま極りありあふ  
乃極細とててててててててて

古人天云倭勢太神文ありててててて  
一年よめくさ事とてててててててて



ふりハお遠すりてや中但又久し  
貴くともろくもや堀川院百首中  
あひりあひのそあひりてら神の文  
くしらすそりり中そあひりてら  
とありはふて

文武天皇朱薙二年二十一年一度  
可有近きく由宣下し

私花の義物くく河の義不用と  
くもこれとのま

いふかりありて

自主此所さす候中し

流乃流くあに流むく

源の流りせりてあくくハあ

ましかり 秘日

岡くく流りてあつる

御八講かたて

私流院とま流の流くくあ  
みなり多ひて志りてあつる



うーあるゆへに

喜文と云ふをまうり

<sup>昇</sup>は時十一歳に 秘十一歳に明年

也元服十一歳に

<sup>秘</sup>まうり受禪の事あるまきゆへ

先づ死すまうり

おひまうりこひ

源氏まうりまうりまうり喜文の

四まうり

あられと云ふをまうり

源氏まうりまうりあられまうり

まうりまうり

喜文まうりまうり

<sup>昇</sup>まうり受禪の事あるまうり

先づ死すまうり

あられまうり

源氏まうりまうり

まうりまうり







あはれをうのよれよとてなつて  
しと故のうらぐまらとあはれ  
は方ふ及りて

源  
かきもきつあはれはうら朝きりせら  
やし人とあはれやうらな

死  
あはれはうの朝音ハ人丸のき  
とまりうらやしのめえのうらと立  
て都人のあはれとまらうらま  
あはれ

昇

朝音れをうらやあしうらとまじ人  
のかしじんやうらなはひやらん  
かき人—— 花ハ皮油うら  
きうらやのうら  
しゆらうらうらとむ乃流り

秘

かきもきつあはれはうら朝きり  
あはれはうの朝音ハ人丸のき  
あはれはうの朝音ハ人丸のき  
あはれはうの朝音ハ人丸のき



ふはつてはひよ原ののよとと  
ひおろりんとおれさうりあわ  
アその路也又乃義ハ美奈才十  
みり君のゆくゆきこのやうに  
たぐい立かけくつ義と志  
せせじら路れそん運ハまろろ乃  
ゆくあはさあこのかろじらあめ  
とかり人まきし

私はも義此門君のゆくゆきの

と引り義をおるなり原のい  
うりあうーれより事と世  
くろあもくこりあひもらんあ  
のうりそんりさうりいされ  
かけくつきかりといふ義が  
し海一梅名もそそそ  
あむ義  
やま并或抄少もゆ説とそを  
うり可







権帥よりたゞるハ各別のりなるま  
ハ大氣とたゞるまきそ府勢とと  
アとまかふハ一ハ大ととと権  
帥と大氣とふフ方とたゞるま  
なり此ゆへより大氣と帥とま  
より但権帥を大氣とつる例ハ  
是様一様と

物知りひさめわららして  
源の由事ととらたもさつらに

西海東して物知りたはるり人志  
ねは忠ひより事なるま  
秘 都よりのりまあととら

花鳥記  
あらしまあく人一まきと源氏の  
とらたもさつら事ハ今物  
あつらるまきとあわら

花  
物知りのりまあととら  
とらとら人ほらあひと



ひさしとされたりやうなりて  
氏の君れ都へつりぬとて  
うたゝぬと

まじりあまつらりて

<sup>何</sup>蟻此云 摩 愚 那 波 日 本 紀

<sup>秘</sup>まじりあまつらりて  
くさるまよひのせよ  
くらせうとくかり蟻白會入平  
蔵は字よりんたり

<sup>并</sup>

<sup>死</sup>

あまつらりて又む未波又と  
或然りまじりあまつらりて  
んそあまつらりて  
あまつらりて  
夕伏あまつらりて  
来て誰と志とぬと  
まじりあまつらりて



きこらぬ事、日本統りしむら  
ふ事かれと、葦笠さうりしむら  
不見あり、又み節、君此文と  
くりし日、向ふると、矢<sup>や</sup>しむら  
らんりしむら、葦笠さうりしむら  
いしとお知、侍り、又河海抄り、  
文乃使のひしむら、わくしむら  
とまゝくむら、のしむら、わくしむら  
とお知、侍り、別りしむら、

かり

私事、源徳秘訣ありあり

ら  
允恭天皇

虫乃名や、吉北季友りしむら、  
蠅のしむら、わくしむら、の目色、  
まゝ物しむら、ひしむら、わくしむら、



き振舞とつりては所よりてとるは  
神とまゐひらる也

八節若

を月のの〜にあらはれぬを〜  
やてらるる神風ををりや

源の流す〜あつて〜  
つ連りてし〜まて源の流す  
ろもかけきつり〜神もみなく  
ち〜りて

手か〜あ〜り

秘

のせ〜ら〜と〜れあ〜り〜  
大氣の女も流し〜  
也事つり〜

私〜〜せ〜り〜  
て〜〜と〜れ〜  
あ〜の〜秘〜大氣の女〜  
り〜也事つり〜

八節

か〜り〜て〜  
た〜り〜り〜神〜れ〜ひ〜







ひみぢの源氏平生の事多し  
なれととれはまゝにすくすく  
のりて

私物系ありてかゝるく思ふ  
つゝ其がまゝにまゐるは  
源の遠きありて

花散るゝかゝるも

そよよの草のまじりあり

中くゝありて

卯のまゝにありて  
あやまらるゝ海系ありて  
殊をたらしむるも  
因弟子乃地あり











